

---

# 勇者と黒槍

victor

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者と黒槍

### 【コード】

N6970U

### 【作者名】

victor

### 【あらすじ】

人嫌いな牟田吉夫は、親友の緋山明とその日に出会った二階堂恵美と一緒に、異世界アースに召喚されてしまう。そこで待ち受けていたのは、魔王を討伐して欲しい、ということであった。

正義感あふれる明は心地よく引き受けて、勇者となってしまう、吉夫と恵美はそんな彼を支えるために強くなることを決意する。

キャラクター紹介（最終更新9月18日） ネットバレ注意（前書き）

思いつきで彼らの関係について書いてみました。

本当は、作者であるおれがあいつはどっただけ……？ とボケてしまったがために、書いてしまいました！ ですが、主人公たちについてよくわかると思いますので……だまされたと思って読んでください。

牟田吉夫

女性のように線の細い顔立ち、漆黒に染まった瞳と髪。女性と見間違うほどの顔つきをしているおかげで、彼に女装させたら「胸が残念な美人」となる。ただし、女だよな？ と男から言われたら、即血祭りに上げるほど。何かをやるときにはためらいもなく実行するため、恵美は彼が自分を脱がさないのか心配

だったりする。（それでも、恵美は楽しんでる様子？）

現在女性化してしまい、髪は絹糸のように細く、眼は海のように深く染まっている。胸も大きくなってしまい、彼は巨乳がどれだけ大変なのかその身で実感している。

過去に親友から裏切られたせいで極度の人嫌いとなり、誰も近寄らせないようにしていた。だが、学校を転校したことによって、鈴音と出会い、彼女のしつこい質問攻めで心を開いた。

それでも人嫌いは治っておらず、親しい友人がいなければ、第三者と話すらしい。何故か、恵美の時のみ、明の必要性などなかった。

恵美、ジュリアスをからかうことが好きで、よく恵美の頬をつねてしまう。

緋山明

あちこち跳ねている赤っぽい髪と紫色の瞳。整えられた顔つきはハンサムであり、女子からよくモテてしまうモテモテ君。胸の大きい人。ジュリアスや吉夫が女性化した姿が好みであり、サティエリナの胸には興味なしの様子。

幼い頃から、正義の味方にあこがれており、困っている人には救

いの手を差し伸べる心の優しい少年。しかし、それがよく不良にからまれている女の子たちを助けるイベントで活躍してしまい、フラグを立ててしまうことまで発展。おかげで、吉夫から、助けた女の子に必ず告白されてしまう、といわれてしまい、彼もそのことを自覚しながら、彼女たちを助ける。

好きな人には声をかけることすらできないヘタレであり、それがサティエリナとうまくいかない理由となっている。だが、吉夫からのアドバイスで彼女と接近中である。

勇者として召喚された彼は、この世界の悪の根源たる魔王を倒すためにがんばろうとしている。

## 二階堂恵美

前髪を目元まで短く切りそろえ、大きな瞳にかわいらしい顔立ち、まっすぐに伸ばされているストレートな髪はしっかりと手入れが行き届いており、髪には花のかんざしをつけている。

鈴音の提案で吉夫と彼氏彼女になることになっているが、本人はあくまで、友達、として受け入れた。それは吉夫も同じであるため、彼らの関係はただの、友達、関係である。

田倉高校で剣道部の部長はやっており、彼女の实力は個人で全国大会までいける。

アースに召喚されてから使用している刀は、竹刀と一緒に入れていた物で、彼女いわく護身用だそうだ。

初日に吉夫と出会い、彼に女装をしたら似合うかな？ と思い、女装させてみたらビンゴであった。以来、彼を女装させることが趣味になってしまい、吉夫が女性化しても、彼女の意思は変わらない。レス疑惑がかかっている。

## 九条鈴音

人懐っこい笑みをしており、たまに獰猛な笑みを受けべる少女。

髪は後ろにまとめるだけのシンプルな髪型、眼は漆黒に染めり、顔つきは吉夫とよく似ている。二人一緒に街を歩けば、姉弟と間違われること間違いなし。彼女としては、吉夫が弟であって欲しいと願っているが、彼は拒否している。

護身術に槍術を習得しており、吉夫と明が2人がかりで攻めても彼女には勝てないほどの強さ。一時的に吉夫に槍術を教えたため、彼とは師弟関係でもあった。

恵美に彼氏彼女の提案をした本人であり、吉夫に対する気持ちは断ち切るために彼女はそう告げた。もしも、弟であつたら　と何度も考えたことのある彼女が出した結論でもある。

現在、魔王側にいる。

### サティエリナ

寡黙な少女で、常に無表情でありながらも親しい人の前では感情豊かになる。栗色に染める髪をロングヘアに伸ばし、髪と同じ栗色の目をしている。最近では、明が現れたおかげで寡黙な少女は自ら話をするようになっており、彼に恋心を抱いている。

姫として守られるだけでは嫌だと感じた彼女は、母から魔法を教わり、時間があればそのことのみ勉強していた。ついた2つ名は、ユグドラシルの魔法姫。それだけでは満足できなかったサティエリナは、今度はジュリアスに剣術について教えて欲しいと頼み、交渉の果てにジュリアスは折れた。

接近戦、遠距離戦、どちらもできるがジュリアスによって魔法のサポートしかできないことが不満だったりする。

### ジュリアス

金細工のように輝く髪をポニーテールでまとめ、背はモデルのように高く、凛々しい顔つきをしている。エメラルドグリーンの目には、自信があふれており、男ばっい口調。

サティエリナの専属騎士として常の彼女の傍にいて、よく悩みを

聞いてあげることが多いため、彼女たちの関係は親友である。

一番残念なのは、強者と戦うことが好きな戦闘狂であるため、誰も彼女に近寄らない。しかし、最近では吉夫や恵美という強者、または友達ができたおかげで毎日彼らに手合わせを求める始末に。

吉夫にからかわれることがあり、彼にはふざけるな！ といいながらも楽しんでる（？）。最初は「変態」と吉夫のことを呼んでいたが、彼が槍術を習得していたことにより、「馬鹿者」と言いなす。

ツンデレ化してきているのが、作者の悩みだったりするとかしいとか。

## 日常

「ふあ……」

「吉夫があくびをするなんて珍しいな。夜遅くまでなにをしていた？」

田倉高校の制服である学ランを身にまとう二人の少年の内、あくびをしている少年 牟田吉夫は女性のように線の細い顔立ちと、髪と同じように黒く染まった双眸を彼に向けると同性である少年は一瞬ドキツとしたが、あえて動揺しないようにポーカフェイスを演じる。

「明の小さい頃に書いた作文について、おれは全員に発表するかしないか悩んだ」

「悩むなよ！ いや、その前にどうして僕の作文についておまえが知っている!？」

「鈴音から教えてもらったのさ」

「り、鈴音め……覚えていろよ……!」

ここにはいない幼なじみにこっそりと復讐プランを練る少年の名前は緋山明。あちこち跳ねている赤っぽい髪と紫色の瞳、整えられた顔つきはまさしくハンサムで、女子たちから普通のようにけっこうモテるモテモテ君で、彼女たちからは毎日のように告白されているがすべて、本気で好きになれる人じゃないといけない、と返答しているおかげで余計に女子たちのハートに火をつけてしまう始末。女子たちにとって毎日が戦争で、猛烈アタックして来るほどの人気ぷっり。

「ふあ……エロゲーをしていたのさ」

「さつらととんでもないことをありがとう!？」

アニメ、マンガをこよなく愛する吉夫がとうとうエロゲーまで手を伸ばしたことに、明を頭を抱えたくなるが吉夫だからいいか、という理由で追求しない。彼にだつてさまざまに興味があることぐら

い承知しているから軽口を叩き合い、昨日のこと、学校のこと、授業のことについて話していると、

「離してください」

という少女の声と、

「ああん？ 人に謝っただけでは足りないんでよお、だからよお、体で払えつつうの」

という聞いただけで相手が下種で、野郎だとわかった明は目の前にいる三人の不良らしく人物と、田倉高校の制服を身にまとうセーラー服の少女がいたため、迷うことなく彼は突入しようとするのを、肩をすくめる吉夫はまたフラグを立てるか、と予想しながら彼を止めることなくそのままにさせる。前までは明を止めていたが、彼の困っている人を助ける、という明病にかかったせいで吉夫は仕方なく彼を手伝うことに。

「そこまでしたらいいだろ？」

「ああん？」

不機嫌な顔を明に向けた髪型がリーゼントという不良は彼を見ると、次に吉夫のほうを見てからああ、こいつは女だ、と見た直後に口にした彼は後悔することになる。

「……殺してあげようか？」

周囲の温度が氷点下並みまで下がったぐらい空気が寒く、これを何度も感じたことのある明は身震いをする。彼だけでなく、他の人たちも身震いをいてガタガタを歯を鳴らしているが吉夫には関係ない。自分のことを女と、呼ぶ連中には必ず制裁をしなければ気が済まない吉夫が一步だけ、前に出るとひいっとリーゼントは悲鳴を上げる。

「さあて、なにをしてあげようかなあ？」

「はっ！ 女になにができるんだよ！」

強がりを見せ付けたリーゼントに吉夫はにやつと不敵に笑い、逃げたくない いや、逃げられないリーゼントは彼に殴りかかろうとするが、自ら距離を詰めた吉夫は彼の懐に入ると重い一撃を彼に

くらわせた。喧嘩慣れしているリーゼントであっても、いまの吉夫は女呼ばわりされたおかげで普段よりも強くなれる、という男子のみに対する特性をもっている。

「てめえ、山さんにないを　ごがっ」

リーゼントの部下が彼に殴ると予想していた明は先に彼を蹴りまくらわせると、参戦しようとしたもう一人は吉夫と明の顔を見比べていると明が忠告した。

「いますぐに僕たちの前から消えないと　あいつ、おまえまで手を出すぞ？」

「お、俺は男に興味をねええー！！」

「あ、やべ。こいつ、死んだわ」

「なにを言っているんだよ！？　げぼっ」

明と会話していた不良は吉夫の気配に気付くことなく、後ろから尻を蹴られた不良は明に飛ばされて、はあ、とため息をついた明は飛ばされるそいつを殴っておいた。あっという間に終わった喧嘩、それも一方的な勝利で収めた吉夫と明はこのように慣れたので、彼らの日常の一部である。

「あれ？」

「どうした、明？　……ああ、さっきの女の子のことなら、おれが不機嫌になった時に逃げていったぞ」

質問する前に吉夫から回答をもらった明は納得し、どうして質問することがわかるのさ、と問いかけると吉夫は何年おまえの相棒をしている？　と返すと今度は何も問いかけない。何年も一緒に不良にからまれている女の子を助けたことのある明は、これから起こるイベントに頭を悩ます。

そう、いつもの告白タイム。

だから、女の子にモテるのだ。

「あなたのことが好きです!!」

と、教室の前で朝助けた少女から告白される明はいつものようにごめん、と返すと、少女はそれでもあなたのことをあきらめません!! と告げた少女は自分の教室に戻っていく。

「おー、さすがは明、女の子にはよくモテるねえ」

教室に戻れば、明の幼なじみである九条鈴音と会話くじょうりんねをしていた吉夫が冷やかすと、彼はやめてくれよ、と返して鈴音のほうに向く。

人懐っこい笑みをしている鈴音の髪は吉夫と同じように黒く、目も漆黒のように黒いたため、鈴音と吉夫が並んで歩くと兄妹に見間違われるほど二人の顔つきは似ている。髪を後ろに束ねただけでシンブルな髪型だが、何故か鈴音にはよく似合っていた。

「なんや、あつきー。うちを襲う案について考えると大胆やな」

「誰がおまえなんか襲うか!! そもそも、おまえを襲う前に僕が殺されるだろう!!?」

「もちろんや、うちには誰にも指一本触れさせんよ?」

人懐っこい笑みを消した鈴音は獰猛な笑みを浮かべると、明は絶対に彼女には逆らわないと、再確認をした彼は心のなかで大きくため息をついた。鈴音に逆らうこと＝死ぬ、という方式が明の頭の中に刻まれているのでこれ以上何も言わないでおく。

「それにしても……あつきーはまたフラグを立てるとは罪な男やなあ?」

「う、うるさい! 僕が好きでフラグを立てているわけではない!」

「だよな、こいつの夢は」

「うあああ、黙れ吉夫!! それだけはタブーだ、タブー!!」

吉夫が彼の幼い頃の夢について語りだそうとすると、必死に阻止

する明に鈴音はくすくすと微笑み、吉夫はにやにやしている。

ちなみに、明が小さい頃に書いた作文には、僕の夢は正義の味方になることです、と小学一年生の時に堂々と全員の前で発表したことがあるため鈴音からあつきーの夢は と口にされたら彼の人生はそこで終了。あまりの羞恥に人前を歩けなくなるほど、明は自分が書いた作文を思い出すだけで死ぬほど恥ずかしくなる。

だが、正義の味方と幼き明が願っていたことは、現に不良たちからまれている女の子たちを救う、ということだけで叶えられている、と彼は気付いていない。もしくは、気付いていても、あえて無視しているのか。どちらにしても、彼は正義の味方を続けるつもりなので、不良たちとの喧嘩は日常茶飯事である。

「あ、そうそう。よっしーには大切な話があるからちいと耳を貸してくれん？」

「ん、別にいいぜ」

吉夫の耳元まで顔を寄せる鈴音の姿は、まるでこれから頬か耳にチユウするようにしか見えぬ、目の前でこのようなことをされる明は彼らから視野を外す。正直、この二人がそろっただけで人目を集める美貌と街を歩けば、男女関係なく振り向かせてしまう顔立ちをしているから、あつという間にクラスメイトたちの視線を集めた。

「……ということや、どうやよっしー？ 興味あるやろ？」

「余計なお世話だ。アホ」

「実は興味津々やったりするやないか？ よっしーにはそろそろ必要なお年頃だもんなー」

「おまえはおれの姉さんかよ」

「んー、よっしーがうちを姉さんと認めてくれるなら、うちはよっしーの姉さんになってもええけど？」

（う、なんとという魅力的な誘いだ。でも、こいつとだけはそんな関係になりたくないから、死んでもごめん。姉さんという立場にいれば、きつと鈴音にからかわれるが……それもいいかもしれない）

鈴音が姉という立場になれば、きつといういろとおもしろくなれ

そうと予測していると、小悪魔の笑みを浮かべる鈴音に、またからかわれていると気付かされた吉夫は心の中で言葉をしまっておく。

「……というか、さっきの件については本当か？」

「む、赤面してもいい場面やったのになあ」

「おい、さつらと本音を漏らすな」

「冗談冗談。でな、やっぱりよっしーも男の子だから気になるんやな？」

「まあ……な」

鈴音の視線から逃げるように顔をそらす吉夫にくすくすと笑う鈴音、わずかに頬が赤い吉夫に明はこれはおもしろいことが起きそうだと予想していた。

放課後の田倉高校のある教室で、吉夫と明はとある人物を待ち合わせをしていた。鈴音から、その人物は部活をしているからしばらく時間がかかるかもしれない、とあらかじめ伝えられているので、二人は会話をしながら、鈴音の親友を待っていた。

なぜ鈴音の親友かといえば、吉夫には彼女がいないから、せめて彼女になるためにまずは友達から始めようということで、鈴音の親友はあっさりとお友達の誘いに乗った。鈴音の親友は彼氏彼女の関係よりも、友達という関係を結びたいという意味で誘いに乗っているが、鈴音は、これによっしーは幸せになれる、と意味ありげな言葉を呟いていた。

そして、明が吉夫と一緒にいるのは会話のサポート役。吉夫はもうも、異性に対して興味などまったく見せずに素っ気ない態度で対応しているから、彼と会話できる明がいないとまったく話は進まないというのだ。基本的に吉夫は誰にも興味さえ示さないから、唯一会話できる明と鈴音がいないと、話など出来ない状態である。あとは、鈴音に報告しないといけない役を買っているため、明にとつてはせいぜい彼らを観察するか、会話を成立させるかしかないの、けっこう楽しめるかもしれない。

「遅れてごめんね、吉夫くん」

ガラッと教室のドアを開けた少女に息を呑んだのは明で、吉夫は目の前に立つ少女を見ているとかわいいな、と心の中で密かに評価した。前髪を目元まで短く切りそろえ、大きな瞳にかわいらしい顔立ち、まっすぐに伸ばされているストレートな髪はしっかりと手入れが行き届いており、髪には花のかんざしをつけていた。彼女に着物でも着せたら、大和撫子という言葉がとても似合いそうだ。

だが、彼女の背中に背負われているのは、細長いなにかのおかげでせつかくのかわいい、という雰囲気台無しにするが、ギャップ萌え、というのを起こしてしまうかもしれない。

「鈴音の親友は、剣道部部長の二階堂恵美か」

吉夫が隣にいる明にポツリと呟くと、はっとした彼は彼女が鈴音の親友であることに我が目を疑ったが、すぐに恵美から、

「私のことは知っているよね？」

と、確認された二人に対して吉夫は、

「鈴音の親友だろう」

と、返せば、花が咲くのような笑顔で微笑みを向けられた吉夫はつい目をそらす。なにせ、恵美という存在はともかわいく、あの笑顔を向けられたら同性であつても、ズキーンと心臓を撃たれるだろう。

「なあ、恵美」

「メグって呼んで、みんな私のことをそう呼ぶから」

「恵美は鈴音からなにかしろ、ということを言われていないよな？」  
「ううん、なにも言われていないからね。ただ、私は吉夫さんと友達になればいいと思っっているし、恋人関係になるつもりとかまったくないから。あと、メグだからね」

かわいらしい顔立ちとは裏腹に意思の強そうに瞳を直視した吉夫は、ただかわいいただけの人じゃないよな、と認識した。彼女は田倉高校の部長であり、全国大会まで個人で進出したことのある実力者だから、と安堵の息をついた吉夫は隣で固まっている明に呆れた。

「へえ、吉夫くんって見た目よりもおもしろい人だね」

「うるせえ」

「あ、これとか似合うかもしれないから……どう？」

「あ、いいかもしれないな　って、おれはなにをしているんだあ  
あああ！！」

心の奥から叫んだ吉夫のことなど気にすることなく、恵美は彼が身にまとっている服　田倉高校の女子の制服を眺めながら首をかしげる。そう、吉夫は田倉高校の女子の制服を着ているのだ。それも、恵美の制服である。逆に恵美は彼の制服を着ている。

「なにって……コスプレだけど？」

「なにがどうやってコスプレになるんだよ！！　おい、明、なんとか言えよ！！」

この場で唯一まともな明に話を振ると、彼は吉夫の女子バースーツごく似合うから何もいわないぜ、と口にした彼はもはや恵美の毒牙にかかった様子。

なぜ、こうなったかと言えば、恵美が吉夫くんって女の子っぽい顔をしているから、もし女装をしたらどうなるだろう、と何気ない一言で始まったのがこの発端であった。女装だけは嫌だ！と、まっさきに主張した吉夫に明はおもしろがって、これは僕たちだけの秘密だからいいじゃないか、女装やつてもいいだろ？と、ぬかす明を殴り、恵美がなにか言い出す前に話題を変えようとすると、狙っていたかのように、吉夫の携帯にメールが届いた。

メールをするのは、明か鈴音ぐらいの二人しかおらず、後者しかない吉夫は恐る恐るメールを開いてみれば、メグみんを泣かせたらよっしーを泣かすと短い文しか書いておらず、恵美を見てみれば、目元に涙をためていた。だから、吉夫は仕方なく恵美の女装に付き合うことになるがこれは自分のためであって、けっして恵美のためではない。

それから、恵美は最寄りのランジェリーショップに入ると男性である二人は視線をたっぷりと浴びるが吉夫は気にせず、明は泣きたくなかった。恵美は彼らを関係者以外立ち入り禁止区域のプレートが書いてあるドアをくぐり、そこに広がる世界に男性二人は言葉を失う。

そこにいるのは、さまざまな年代の少女たちが多種多様の服コスプレという名の服を身にまもっていたから、吉夫と明はここが男子禁制ではないか、と即座に恵美に確認すると彼女は、もちろん、だってここは女の子のパラダイスだよ？と笑顔で教えてくれた時に引き返そうとしたがすでに手遅れであった。

恵美はいつの間にチャイナ服を手にして、うふふ、これを着てくれないと鈴音に私を泣かせた、と伝えるからと脅迫された吉夫は彼女から服を受け取り、脱衣室で着替えた。その間に恵美はカツラ、カラーコンタクト、香水などなど用意していたことに明は吉夫に同情してしまう。

数分後、脱衣室から姿を現した吉夫　のはずなのに、そこには牟田吉夫という人物ではなく、美人がいた。男とは思えないほどす

らつとした細い脚は艶やかで、雪のように白い肌と赤いチャイナ服はどちらの色もしつかりと強調させており、腰まで伸ばされた髪カツラをかぶっているのにも関わらず、そこには一同の注目を集める胸だけが残念な美人がいた。

彼の姿に恵美は鼻から血を流して興奮状態に、明は前かがみになるほどのインパクトがあつたのは余談である。それと、明が鈴音に彼の女装姿の写真を送ると、これはええ！！これは最高や！！という返信をもらったのも余談である。

これで終わると吉夫が思っていたが、恵美は彼にじゃあ、次はこれ！あ、次はこの衣装かな？これよりもあれかな？といった間に、吉夫は恵美の着せ替え人形になっていた。

極めつけには、吉夫と恵美の制服と取り替えるということまでになつてしまふ。

しかも、お互いの制服がぴつたりとサイズが合うため、着ていてもまったく違和感などなく、普通に田倉高校の制服 恵美の制服はいい匂いがするため、これが女子独特の香りか、と納得した吉夫は甘い匂いに頬を赤く染めてしまふ。

それは吉夫だけではなく、恵美も彼の制服を着ているため、汗くさい、と彼女は予想していたがそれほど汗くさくなく、落ち着く匂いがしているおかげで、これが彼の匂いだとわかると彼女もまた、頬を赤く染めてしまふ。

この二人の反応が初々しく、明はもし、うまくいけばカップル成立だな、と確信した彼は鈴音にメールすると、よっしーが幸せになれば、うちはそれだけで幸せや、と一分もしない内に返信された。明は鈴音が彼に対してどのような感情を抱いているのか知っており、自分の恋をわざと他人に譲る鈴音の行動が理解できない彼は大きくため息をついた。彼女がその気になればうまくいくのに、あえて鈴音はそうすることなく、いつも彼に彼女を推薦していたのを明は知っており、その度に吉夫は必ず拒否するのに、今回のみ 恵美だけは受け入れた。彼女のことを気になるという意味。



うと行動を起こすが体が思うように動かない。

「よっしー、あつきー、メグみん!!!」

魔法陣の外には何故か鈴音がいて、泣きそうな顔でこちらに救いの手を差し伸べてきて、明は彼女の手を取ろうとするがやめた。鈴音が手を伸ばしている相手は吉夫で、彼も彼女に手を必死に伸ばそうとしているが届くことなく、それでもお互いを求めるように伸ばされた手は、ほんのすこしだけ触れた。後もう少しで届く、あともう少しで鈴音に、吉夫に届くはずだったのに 彼の姿は唐突に消えた。

さつきまでそこにいた明の姿はどこにもなく、恵美の姿もどこにもいなく、ほんの少しで届きそうにいた吉夫の姿がどこにもいない。「よっしー …!!!」

愛しき彼の名前を叫ぶ鈴音は、彼を連れて行ったなにかが許せずに、すぐに行動を起こした彼女は信じたくないことを心の中で否定しながら必死に彼の姿を探し求める。

## 奪われた日常

「なあ、メグみん。彼氏とか欲しいならうちがええ人を紹介してはるよ?」

「い、いらない!! 私は剣道で精一杯だからそんなのに時間がな  
いよ」

「嘘つきい。ほんまは誰かと付き合いたいやる?」

「り、鈴音りんねには関係ないよ!!」

田倉高校までうちと一緒に歩く少女は、顔を赤くしながら否定するのは親友 二階堂恵美、通称メグみんはうちを睨みつけてくるけれど、メグみんのかわいい顔ではまったく効果があらへん。前髪を目元まで短く切りそろえ、大きな瞳にかわいらしい顔立ち、まっすぐに伸ばされているストレートな髪はしっかりと手入れが行き届いて、髪には花のかんざしをつけているのがメグみん。うちはメグみんが誰かと付き合いたいとずっと前から気付いていたから、メグみんに彼氏作れば? と気軽に問いかけるのに、絶対に嫌!! と拒絶するからなあ。ま、うちとしてはメグみんが彼氏さえ作れば、からかえる要素とかたっぷり増えるから……ほんま、彼氏いらんのか?

「鈴音、私には部活があるからね」

「知っているよ、だからこそメグみんにはメグみんを支える人が必要なんや」

「私にはいらない!!」

メグみんが背負う袋には竹刀が入っているので、それを見せ付けるようにうちの前に差し出した。メグみんは田倉高校の剣道部の部長で、個人で全国大会まで進出した実力者。彼女の強さの秘密は毎日努力を積み重ねて、必死に続けた結果がいつの間にも誰よりも強く、気高い存在になっているのは……うちだけの秘密や。

「でもなあ」

「いい加減にしないと私、怒るよ？」

「よっしーは他の男子よりもなかなかかっこええで？」

「よっしー……？ あっ、あなたの好きな」

「うちが好きなのはあっきーや」

メグみんの言葉を遮ったうちはあえて、自分なあっきーのことが好きだと思い込んでおく。消沈するメグみんには悪いけどな、うちはいつもあっきーに守られてきたからなあ。だから、あっきーのことが好き、そうしておくほうが胸を締めつける痛みからそらす。

よっしー、メグみんにはいつの日からか彼のことが好きとばかり話していたから、彼女はうちがよっしーのことが好きと思われる。そうであつてもええ。

でもな、うちにはできん。うちはあっきーに守られていたから、いままで守られていた分だけあっきーを守りたい。そのためにもうちは護身術を覚え、うちと相性がぴつたりと槍術についているいと学んだおかげで、よっしーとあっきーが二人がかりでもいまのうちには勝てへん。

「そう……」

落ち込むメグみんを無視することにしたうちはあることをひらめき、それを彼女に提案すると予想通りに赤面する。よっしーと付き合えば？ ということやけど。

「絶対に、絶対に嫌よ！」

「でもな、よっしーは他の男子よりもまじやし、他の女子たちのことなんか見向きすらしないで？」

「……本当？」

おっ、これはいけるかもしれへん。

「よっしーはうちと一緒にいる時、美少女が隣を歩いても振り向きもしなかつたからな」

「ある意味すごいね」

「なっ？ もしも、よっしーがメグみんと付き合うことになったら、メグみんしか見ないかもしれないから……浮気するよりもいいやな

いか」

「うっ……」

「メグみんも、もし付き合うなら自分しか見てくれない男性がええやろ？」

沈黙するメグみんはゆっくりと首を縦に振ると、うちは人目も気にすることなく彼女に抱きついた。これで……よっしーとメグみんがうまくいけば、うちのこの胸の痛みも消えるはずなんや。

こうして、うちはよっしーとメグみんを付き合わせよう作戦を開始した。

放課後、うちはよっしーとあつきーにある教室に待機するよう指示しておいて、メグみんがそこに入るのを見届けた。

すると、すぐにあの三人が仲良く談笑しながら教室から出てくる。よっしーとメグみんが普通に会話をしている光景なんて、予想すらしていなかった。

「……嘘やろ？」

よっしーがあっさり打ち解けるなんて、夢でも視ているような気分や。うちでも打ち解けるまで二週間もかかったよっしーがメグみんと楽しそうに話しているのは……信じられんな。嫉妬してしまふなあ。……嫉妬？　うちがメグみんに嫉妬してある？　それとも、人嫌いのよっしーが出会ったばかりのメグみんと仲良く一緒にいることが？

わからん。わかりたくない。

うちはあつきーによっしーとメグみんのサポートを任せたのに、

あつきーがいなくても会話が成立しているから、これでは意味がないやないか！！でも、二人つきりにするよりもマシやから……あつきー、そこら辺はよろしくな。

うちは心の中でもやもやする気持ちを振り払うために、よっしーと始めて出会った5年前のことでも思い出す。5年前ということは、うちとあつきーが南丘中学に入学した頃やな。あつきーとはほんま、腐れ縁という言葉が似合うぐらいずっと同じ教室だから、まだカップル扱いされていたなあ。

おっと、話がずれるところやった。

よっしーが南丘中学に転校してきたのは、一ヶ月を過ぎた辺りぐらいやったな。うん、あの頃は美男子が来る！とか、ハンサムだつてよ！とか、よっしーが来る前までそんな感じの噂が流れておつたな。で、実際にこちらに来た少年 牟田吉夫はほんまに、美男子やった。漆黒に染まる髪と目、女性と見間違うほどの線の細い顔立ちをしていた彼に、うちはついつい見惚れてしまった。

彼はうちの心境など知ることなく、うちの隣に空いている席に座ることになったせいで、女子から睨まれるはめに。それでも、うちは気にすることなく、彼に話かけたけど無視された。一度だけやない。何度も何度も、よっしーに話しかけても無視されたことは今でも思い出せる。

休み時間にはよっしーの周りに人だかりができてしまい、うちも彼のことについて興味あつたからそこに参加していたら、よっしーは最初に質問してきた人に、近づくな、と拒絶していた。呆然とするクラスメイトたちのことなど気にすることなく、彼は教室から出て行った。

それからというものの、クラスメイトたちが彼に話しかけても無視されるか、睨まれるかの行動をいていたおかげで、よっしーはうちらとの間に見えない壁を築き上げていた。でも、うちだけはお構いなしに、よっしーに話しかけたり、質問したり、からかったりしていたため、彼はうちだけにしか聞こえない小声でバカ鈴音と、うち

のことを呼んでいた。不思議と腹が立つことはなかったから……うちがバカ鈴音と呼ばせるかわりに、よっしーと呼ばせてなんて言っていたなあ。それまでは吉夫と呼んでいたから……ある意味、あの時にうちとよっしーの関係はクラスメイトから友達にステップアップしていたことは確かかなことやな。

せっかく、友達になれたからうちは幼なじみのあつきーこと緋山明を紹介すると、二人そろって同じことを口にした。鈴音はバカだ。と。苦笑し合う二人はそれだけで打ち解けたのか、うちのことについて議論しだすことになった時は彼らにアホ！ とつい叫んでもうた。でも、あれだけ他人を受け入れるのに時間がかかるはずのよっしーがあつきーとあつきーと打ち解けたのは……うちのせいかな。「え、あ？ メグみん？ どうして二人をそんなところに連れていくの！？」

気が付いたら、メグみんはよっしーとあつきーを連れてランジェリーショップに入るのを目撃したうちはすぐに追いかける。中に入ると、うちはいつもメグみんと一緒に来る店だと気付くと、安堵の息をついたうちは店員さんにメグみんはどこですか？ と聞いてみれば、いつもの場所ですよ、ニコニコしながら答えてくれた。

いつもの場所。そこはうちとメグみんが店員さんから、会員になれば二割から三割も安くならまずよ、と誘われて会員になってみれば、あれ、やったからなあ。おそらく、メグみんはよっしーをあそこで辱めるに違いない。

関係者以外立ち入り禁止区域のプレートが書いてあるドアをくぐったうちは、もう二度入らないと決めていたここに足を踏み入れてしまう。コスプレ広場に。

コスプレ広場というのは、ここにいる少女たちといい歳した大人の女性などがバニーガール、看護師、アニメのキャラクター、などなどの姿をしているからコスプレ広場。なにせ、この店長は、ちよっとした趣味の人だから……会員登録した人たちは全員彼女に写真を撮られてしまう運命にある。あー、よっしーはここで女装され

ること間違いなしやな。

おつ、噂していれば……いた。ぶつ、あ、あれはよっしーなんか……？ 雪のように白い肌に身にまとう赤いチャイナ服を着た人が脱衣室から出て来て、ここにいる人たちの注目を集めてしまうほどの美しさがあった。胸だけ残念やけど……あの女性のように線の細かい顔、うちとそっくりの顔立ちやから……うん、あれはよっしーや。カツラをかぶっていてもあれはよっしーや。

「嫌や……忘れよう」

中学校生活を3カ月も過ごしていれば、うちとあっきー、それからよっしーの3人でのことは当たり前のことになったから……出掛ける時もいつも一緒だったのは忘れられない。だっていまでも、うちらは一緒に出掛けているから。

でな、よっしーはうちとあっきーとしか話をしないことに気付いてしまい、うちはある日、彼にどうしてうちら以外の人たちと話をしないの？ と聞いてみたら、じゃあ、おれと出掛けたら教えてあげる、とうちを誘った。あっきーは、たまには二人でデートでも楽しんできたなら？ なんて言うっていたから赤面してしまった。デート、うう、いまでも思い出すだけで恥ずかしいなあ。幼なじみのあっきーとはよく出掛けていたから、デートとは認識していなかったうちは今までは、あっきーとデートしてたと考えると……あれ？ 恥ずかしくない？ よっしーの時だけ恥ずかしかった……？

ええい、考えても仕方ない。もう過ぎたことをうじうじ悩んでも意味がない！！

でな、うちとよっしーは休日に遊園地に行った。そこは何度か3人で行ったことのある場所だったのに、よっしーと2人きりで遊ぶ遊園地は格別やった。うちらは日が暮れるまでたっぷりと遊んで、すっかり本来の目的を忘れていたうちは、よっしーがうちと観覧車に乗った時に彼は語りだした。

「前まではおれは鈴音や明のような友達がいて、あいつらと軽口を叩きながらいつもと変わらない日常を楽しんでいた。もちろん、い

まのように他人を拒絶すらししないで、当たり前のように他人を受け入れていたおれはバカだったかもしれない。まっ、いまでもバカだけど。

おっと、話がずれたな。

それで、おれはいつものように親友と呼べる友達から、放課後に校舎裏に来いよ、なんていつもとかわからない調子で誘われたから、放課後にそこに行ってみたよ。あの頃の親友とおれは、どちらか誘うとすぐに出掛けるというタイプだったからな。

放課後の校舎裏は誰も近寄らなくて、人気なんてまったくなく、薄暗くてよく見えない場所だと知りながらも、おれは待ち合わせていた親友と知らない奴らがいた。親友はおれが来るのを待っていたように、知らない奴らにやれ、なんて命令するといきなり殴りかかってきた。訳もわからないまま、殴られていると、そいつらはためえを殺す！ とか、なに女子にモテているんだよ！ とか、男らしくしてやる！ とか、実に身勝手な理由で殴られていたよ。ああ、それと親友はおれになんて言ったと思う？

おまえは俺の友達でもなんでもない。ただのクズで、奴隷なんだよってね。

気が付いた時には、おれを殴っていた男子全員がそこにいなくて、親友だった奴は顔が腫れていたよ。

その日から、おれは誰も信じることもできなくなった。

なのに……ここに転校してきたら、とある人物はしつこく話しかけてくるし、ちよっかい出してくるし、いたずらしてくるし……抵抗するのも面倒だったおれはおまえを、九条鈴音を受け入れるしかなかった。まったく、転校する前に誰も受け入れない、誰も信用しないと決意していたのに……どこかのだれかさんのおかげで台無しだよ。

九条鈴音はただのクラスメイトとして欲しかったのに、友達になってしまったおかげで明まで仲良くなってしまうたじゃないか。全部、おまえのせいだ、バカ鈴音」

「うちのせいでええやないか。うちはよっしーのことを見捨てる  
とができなかったから」

頬をほころばせるうちは、どうして他人を避けるのか、どうして  
見えない壁を築くのか、どうしてうちとあっきーを受け入れたのか  
やっとわかった。うちがしつこく彼に救いの手を何度も差し伸べて、  
何度も彼に拒絶されてもあきらめきれなかつたうちに負けてしまい、  
うちのことを信じてもいい、と思ったのだろう。

「ふふ、この頃からよっしーの姉さんになってもええ、なんていい  
出していたなあ」

おっ、あっきーからのメールや。なになに、吉夫とメグさんの2  
人をくつつけて鈴音は平気か？ 当たり前や。うちはよっしーの姉  
さんで、よっしーが幸せになればそれだけでうちも幸せになれる。  
弟扱いしていることはよっしーには秘密や。

「なあ、よっしー。うちはな、よっしーとメグみんなが付き合うこと  
になっても、うちはずっと、ずっとよっしーだけを追いかけるから  
な」

彼に対する気持ちは友達として好きではなく、異性として好きだ  
と、うちはわかっていているけれどよっしーはうちの大切な弟であつて、  
弟子でもある。弟というのはうちの勘だけど、実はよっしーと双子  
で、幼い頃に別れてしまったという関係があるかもしれない。だか  
ら、弟に恋愛感情を抱くのはタブーやろ？

それによっしーはうちの弟子でもある。槍術を習得したうちは毎  
日を退屈に過ごすよっしーに無理矢理槍術を学ばせ、一時的によっ  
しーはうちのことは師匠と呼んでおつたから……な。

でもな、幼なじみのあっきーがいて、人嫌いのよっしーがいて、  
親友のメグみんながいて、うちと一緒に笑いあえる人たちが近くに  
いるだけでうちにとって、最高の幸せと日常や。

「……ん？」

ランジェリーショップから出た彼らの姿はなかなかおもしろい。よっしーとメグみんはお互いの制服を交換していて、メグみんは背中に竹刀を背負っているから凜々しい男子にしか見えず、よっしーはカツラをしているせいか、胸だけ残念な美人にしか見えない。あれ、あつきーにとって目の毒や。

ふと、よっしーが立ち止まると目の前の空間を穴が開くほどじつと見つめている彼がおかしいと感じ、うちは彼を観察していた。彼の様子にあつきーとメグみんは気づくことなく、会話していて、あつきーが彼に話しかけるとよっしーはなんでもない、という感じで返す。うちは

うちも気にしないで、メグみんによっしーにキスしたら？ とい  
うメールでも送ろうかとした時、あつきーを中心に広がる不思議な  
円が突然現れると、一瞬にしてよっしーとメグみんまで巻き込んで  
いく。何か嫌なことが起きると予測したうちは必死に3人の名前を  
叫ぶ。

「よっしー、あつきー、メグみん……！」

反応したあつきーはうちが伸ばす手に気付いて、うちに手を伸ば  
そうとしたがやめてしまい、彼は手を引っ込める。悪いね、あつき  
ー。うちはよっしーに手を伸ばしておるからな。よっしーもうちに  
手を伸ばそうと必死になっていて、うちも必死になって彼の手をつ  
かみたくて、お互いを求めるように伸ばされた手はほんの少しだけ  
触れた。

あともう少しで届く！ と確信したうちは彼の手を握ろうとした  
その時に、よっしーの姿がいなくなってしまう、あつきーも、メグ  
みんの姿も突然いなくなった。

「よっしー……！」

愛しき彼の名前を呼んだところで彼は戻ることはない、と感じていたうちはよっしーの姿を追い求めるようにあそこに向かった。

よっしーが人嫌いの理由を話してくれた場所に行ってみると、5年前とは変わることなく存在し続ける遊園地は、平日なのに人で満ちている。ふう、懐かしいな。初めてうちをデートに誘ってくれたよっしーはうちを満足させるためにお化け屋敷だったり、ジェットコースターだったり、ミラーハウスだったり、あっきーと一緒にいた時とは違う楽しみがあった。それは、うちがその頃からよっしーのことが好きだったからかもしれない。

「観覧車でも行ってみよう」

よっしーがうちに過去を打ち明けてくれた場所に行くと、観覧車にはあまり人がいなかったからすぐに乗ることが出来た。ゆっくりと動いていくゴンドラに揺れながら、うちはどうやって彼のことを好きになったのか、と考えているとよっしーに会いたくなってきた。身を焦がすように熱く燃え上がる感情は、すなおになったうちの全身を熱くさせてしまい、もう二度と会えない彼の名前を心の奥から叫び求めていると頭に声が響いた。

愛しき者に会いたいのか？

聞いたことのない声、なのに不思議と懐かしくて安心してしまう声の持ち主はもう一度問いかける。

愛しき者に会いたいのか？

「会いたい！ うちだよっしーにもう一度出会って、ちゃんとうちの気持ちを伝えたい！」

たとえば、愛しき者と殺し合うことになってモカ？

「……………」

よっしーと殺し合いをするなんて想像もしたことない。でも……うちの気持ちを伝えるためには正面から彼とぶつからないといけない。彼は一時的にうちの弟子やったし、弟かもしれないから 師として、姉としてぶつからないとうちの気持ちはまったく伝わらないから……答えは決まっている。

「もちろんや。うちのよっしーは誰にも渡したくない。あつ、でもメグみんだけは別な」

……正気だな？

「正気だからこそうちはよっしーと殺し合いを楽しみたい」

ならば、俺のために働け。

「嫌や。うちはうちのために働くから、あなたのために働くつもりはないからなあ」

ここだけは譲りたくないうちが拒否すると、声の主は楽しそうに笑い出してしまふ。なんや？ うち、悪いことでもしたんか？ 不安になっているうちは笑い声が止まるまで沈黙していると、声の主を確認するように再度問いかける。

愛しき者との殺し合いはおまえが望むことなのか？

「うちがよっしーに気持ちを伝えるためにはこの方法しかないから、うちは何度でもよっしーと殺し合いを求める。だって、うちはよっしーの姉さんやからな！」

よっしーには悪いけど、ここで彼の姉であると名乗らせてもらわないともやもや感がすつきりしない。

来い、俺たちの城へ。

目の前に開かれていく穴はよっしーたちをあちら側に連れて行ったことだと肌で感じ、ここを通らなければうちは二度とよっしーに会えなくなる。

……行こう。

うちにとつての日常はよっしーとあつきー、メグみんが笑っている場所がうちのいるべき世界。彼らがいない世界なんて、うちには耐えることなんてできない。覚悟したうちは前に進んだ。

奪われた日常をもう1度取り戻すために。

## 召喚

「本当にうまくいくのかしら……？」

「きつとうまくいくはずですよ、姫様」

姫と呼ばれる少女は栗色に染まるロングヘアを伸ばし、普段は無表情である彼女の顔は大人びているがいまは不安なのか、わずかに眉を寄せている。髪と同じ色の栗色の瞳を隣にいる女性 騎士のほうに向けてと彼女は姫の不安を打ち消すように肯定した。

姫の隣に立つ女性は金細工のように輝く髪をポニーテールでまとめ、モデルのように背が高く、凛々しい顔立ちに鋭い目つきをして鎧を身にまとう彼女の姿はまさに騎士という言葉が似合っていた。エメラルドグリーンの瞳には自身が満ちており、女性の言葉を信じることにした姫は前を向いた。

彼女たちが見つめる先には複雑な文字が刻まれる陣 魔法陣があった。周りには選りすぐれの魔術師たちが魔法陣を囲い、彼らは召喚の呪文を唱えていた。

いま、彼らが行っていることは異世界から勇者を呼び出す魔法であり、この世界を救うための唯一の手段であった。過去に異世界から勇者を呼び出し、危機に陥<sup>おち</sup>っている世界を救った伝説が残されているため、彼らはこの世界を救うために異世界から勇者を呼ぶ方法しかのこされていなかった。

いま、彼らが暮らしているこの国 ユグドラシルは魔王の脅威にさらされている。ユグドラシルという国は森が豊かで、木々に囲まれ、比較的平穏な国であるが最近、魔物が出現しているせいで安心できない。騎士たちがフィオナの森から出てくる魔物たちを騎士たちが追い払っているものの、質ではなく、量で攻めてくるのでなかなか数を減らすことが出来ず、魔王討伐に向かわせるほど戦力の余裕が無い。故に、魔王を討ち、自分たちの国ユグドラシルに平和をもたらすためには、勇者の力が絶対に必要となる。だからこそ、

彼らが行っている勇者召喚は正しいと言えるだろう。

「……そろそろね」

姫がそう呟いた時には魔術師たちが召喚の呪文を唱え終えていた。期待と不安が募る姫と女性は魔法陣をじつと見つめていると、何の前触れもなく光り輝き、一瞬にして視界を奪う閃光が室内にあふれた。

「……ここは、どこだ？」

聞いたこともない声を耳にした一同は勇者召喚は成功した、と確信すると、魔法陣がある場所を見てみると　2人の少女と1人の少年がいた。少年の髪はあちこち跳ねている赤っぽい髪で、目は紫色に染まっていただけではなく、顔もそれなりに整えられていた。

もう2人の少女の内1人は髪を目元まで短く切りそろえて、大きな瞳にかわいらしい瞳、まっすぐに伸ばされている髪に花のかんざしをつけている。肩には細長い何かを背負い、彼女の服装は男装しているのしか見えないが立派な少女である。

あともう1人の少女は線の細い顔つきで、漆黒の髪と瞳を持ち、女性としてはなくてはならない場所が残念であったが、それでもなかなかの美少女であった。同性である姫と女性はいい彼女に見惚れてしまい、彼女はこちらを見つめている姫と目を合わせた。

「ここはどこだ？」

はつきりと聞こえた声に姫は違和感を感じるが、それがなにであるのかわからない彼女は少女の質問に答える。

「ここはわたしたちの国、ユグドラシルです。そして、私たちはこの国を救ってもらおう勇者として、あなたたちを召喚しました」

「……勇者として、か？」

「はい、話が早くて助かります」

「……おい、明。おまえの夢が叶う場所におれたちは来てしまったぞ？」

少女が明と呼ばれる少年に声をかけると、明は少女と姫、それから女性と魔術師たちを見てから、ここは夢だよね？　と少女に疑問

をぶつけると、彼女は彼の頬をつねる。夢であれば痛みなどないが、生憎、ここは現実であるため痛みをしつかりと感じてしまう。

「痛いじゃないか!?!」

「これが現実であると理解してくれたか?」

「ああ。でもさ、どうしておまえは冷静にしていられるのさ!?!」

「ん? 普通だろう? なっ、恵美?」

話を振られたもう一人の少女 恵美はう、うん、と肯定しただけ。彼女もいきなりこちらに召喚されて戸惑っているはずなのに、明のように取り乱す素振りも見せないのはおそらく、この少女が冷静にしているせいかもしれない。

「落ち着け、明。ほら、鈴音が今日はいっていたパンツの色は何色だ?」

「……黒?」

「よし、明、てめえは外れたから殴らせてもらうぞ。ああ、それと正解は赤だからな」

「待て待て待て!! どうしておまえが鈴音のパンツの色を知っている!?!」

「ふっ……それは秘密なのさ」

「なにかっこいいことを言っているんだよ!?! 絶対覗いただろう!?!」

「いや、突風が吹いた時に見えてしまったのさ……あれは最高だよな」

あー、あの時か、と納得している二人組みに恵美は呆れてしまい、姫はまさか人前でこのようなことを語り合う彼らに疲れてしまい、女性はこれから先が不安であった。

場所は少し変わり、客間で勇者として召喚された理由を姫から説明された明、恵美、それから 少女であったはずの人物は男性であったことに驚きを隠せない姫と女性。違和感の正体がまさか女装している男性だとは気が付くことはなかったが、こうして本人を見てみると違和感などまったくなくない。

「吉夫くん、パッドを入れたらもっと女性らしくなるから、そんなに落ち込まなくていいよ」

「……黙れ、元凶が」

「いはいよ（痛いよ）、よひおくん（吉夫くん）」

恵美の頬をつねる吉夫の姿に姫と女性はあまり彼を怒らせてはならない、と察知した彼女たちは彼らの戯れが終わるまでそのままにしておこうかとしたが、明は続きを、と促してきたので姫は続ける。「お願いします。わたしたちの国を、ユグドラシルを救ってください」

「……」

正直、明としては困っている人たちを放っておけないが、それが国を救うことになると話はまだ別となる。自分1人に国を救うという重い責任を背負え、と言われたら誰だって背負いたくはない。明だって背負いたくはないが国を救う術は、もはや勇者である彼らにしか頼る方法しか残されていない。失敗すれば、彼らの期待を裏切ってしまう、絶望という地獄が彼らに降り注ぐ。

「おいおい、なにを悩んでいる明？ いつものように首を突っ込めよ」

「簡単に言っちなよ……」

「言ってやるよ。だって、勇者はおまえ1人であると決まっていな  
いだろう？」

「そついえば……そつだよな」

まだ姫から勇者は誰であるのか、ということなど言われていない

ことに気付いた明は、姫に誰が勇者なのか？ と確認するように尋ねてみた。彼女はええーと、と悩む。

一度に三人の勇者が召喚される事など、これまで一度も起きた事もなかった為、姫は一体誰が勇者であるのか分からず頭を悩ませていたが、

「勇者は明でいいな」

という吉夫の一言で、あっさりと決まってしまった。

「勇者……か。これで僕の夢であった正義の味方はここで一気にクラスアップするのか」

「どちらも人を助ける本質は変わらないからいいだろう？」

「そうだね。……なあ、いつまで女装しているわけ？」

吉夫の姿はいまだに女装しているため、その可憐な容姿は明にとっているいろと目の毒なのでそろそろ、いつもの彼の姿に戻ってもらわないと困る。姫と女性性は吉夫が男であるとわかつているものの、女装を解いた姿など想像できないから彼女たちは、着替えてもらうようにお願いする。

お願いされる前から吉夫は一刻も早くいつもの服装になりたつたため、恵美に返せ、と命令すれば嫌よと一蹴されてしまう。

「……脱がすぞ？」

スカートの下がすーすーする彼にとって、この屈辱など耐えることができずにいきなり最終手段 脅迫をしておく。明は前に吉夫が不良から本当は女じゃないのか？ と言われた時に、彼が迷うことなく不良を血祭りに上げたことを思い出した明は、まさか、と思いつながら成り行きを見守る。

相手は同年代の少女。異性となれば、たとえ吉夫であっても手を出すことはないだろう、と勝手に結論を導く出した明は、もしも、彼が本気で脱がすなら などと妄想したかったが、後が怖いのでやめておく。

「吉夫くんはできるといふの？ それも人前で私を脱がせるの？」  
からかうように彼を弄たぶらかぼうとした恵美は後悔することになった。

吉夫は目の前にいる姫に、

「おい、仏頂面。空いている部屋があれば案内してくれるか？」

仏頂面 姫に問いかける吉夫の目が本気であると見抜き、慌てて恵美に考え直さないの！？ という視線を送られると、恵美も彼の雰囲気の本気であるとわかると、さっきの自分の言葉を取り消そうとする前に吉夫は明に声をかける。

「これから男子禁制となるからこの部屋から出て行け」

「おまえも男だろうが！？ というか、なにをするつもりだ！？」

「ん？ 恵美を強制的に脱がすだけだから」

「貴様！ 堂々といやらしいことを口にするではない！！」

成り行きを見守っていた女性は恵美がおかしなことをされないか、心配であったためついに口を挟み、怒りを爆発される女性はまずは、と前置きをする。

「貴様は、姫様を仏頂面と呼んだことについて謝れ！！」

姫を侮辱されたことが女性にとって腹が立ち、腰に収めている剣を抜こうとした時に、明が吉夫をフォローするようにあえて彼が口にしなかったことを口にする。

「すみません！ まだ名乗ってもらってなかったので、吉夫のヤツ、どうやって呼べばいいかわからなかっただけなんです！ ホントにすみません！」

「うっ……」

「僕は緋山明。で、あっちが女装しているのが牟田吉夫に、男装しているのは二階堂恵美さん」

「アキラに変態にメグミか。私は姫様の専属騎士であるジュリアスだ」

明の隣にいる吉夫がジュリアスを睨むが、彼女は気にすることなどなく姫を紹介する。

「こちらはユグドラシル国の姫であるサティエリナ様だ」

「始めまして、アキラさんに変態さん、メグミさん」

吉夫が変態呼ばわりされることが確定したことに、本人は気にす

ることなどなく、恵美に隣の部屋で脱ぐから後で来てくれ、と言いつつ残すと部屋から去り、脱がされる心配がなくなった恵美はほっと一安心。数分後に、恵美がそちらに行くと、パンツのみの吉夫が背を向けていたせいも、彼女は悲鳴を上げてしまったのはまた別の話。

「……そっか。ここは僕たちがいた世界じゃないのか」

朝、目覚めてみると昨日の出来事がすべて夢であればいい、と明は願っていたが、実際は夢ではなく現実であり、本当のことなので明は異世界に召喚されたことを改めて認めた。正義の味方にあこがれていたけれど、勇者になってみたい、など願っていた結果がいまの現状。

いきなり異世界に呼び出されしまい、いきなりユグドラシルという国を救って欲しいと頼まれてしまい、いきなり勇者となってしまう。怒涛の勢いで彼は勇者という役を手に入れてしまったが、そう簡単に僕は勇者ですよ、なんて名乗れない。

正直、勇者とはなにをすればいいのかわからないが、人々のために戦い、世界を支配しようとしている魔王を倒せばいい、と自分がなにをすればいいのか理解している明は、ベットから体を起こして、なにをしようか、と考えていると腹の虫が鳴いた。

そういえば、昨日は話ばかりでなににも食べてはいないな、と苦笑する明は体を伸ばしていると部屋のドアが開かれる。

「おっ、さすがは勇者だ。もう起きたのか？」

「冗談はよせよ、吉夫」

入ってきた吉夫は朝食の準備ができていて、と伝えると視線を彼

の頭に向ける。彼の髪は元々がはねているが、寝起きということもあって、そのはね具合はまるで爆発しているようになっている。吉夫の視線に気が付いた明はこれはどうしようもないことさ、と髪をなでていくがすぐにびよんとはねる。

「……手入れとか大変だよな」

「おう」

「いつそのこと、手入れとかしないでそのままにしたらどうだ？」

「……悪くはない。でも、これだとかかなり目立つからな」

「明、おまえは勇者としてもう充分に目立っているからそのままでも大丈夫だろう」

髪の手入れに10分も毎日かけている明は彼に言われてみるとそれもいいな、と考え直してからハネハネヘヤーにしておくことに。

食堂に行けば、先に朝食を食べていたサティエリナがまあ、大変、いますぐにあなたの髪を直しましょう、などとメイドたちに彼の髪を整えさせてしまい、明の髪はいつも通りとなっている。それでも髪がいまだにはねている状態であるが、これがいつもの明ヘアーである。

その間に吉夫は恵美とジュリアスの姿を探してみると、彼女たちはメグミは強いとか、ジュリアスさんこそ、なかなかの腕前ですね、とか、今度は引き分けにしないと、語りながらこちらに向かってきた。

「おはよう、吉夫くん」

「……おはよう」

花が咲くような笑顔を向けられた吉夫は目をそらしてしまう。

「吉夫くん？」

「……悪い、まだだめだ」

「そっか」

鈴音から人嫌いの理由を聞いている恵美はそれ以上彼と会話せず、席について朝食を食べていく。吉夫も彼女たちに倣って朝食を食べていき、明とサティエリナが楽しそうに会話している姿にうらやま

しくなる。けれど、信用した人以外では、話を弾ませることができない。召喚される前に、吉夫が恵美と普通に会話できたのは、鈴音の親友だからという理由であって、けっして二階堂恵美という存在を受け入れた訳ではない。加えて、昨日、パンツ一丁の姿を見られているから余計に目を合わせたくない。

「恵美のスケベ」

「どうして私がスケベなの!？」

「女装する時には君がおれの服を脱がして、着せ替え人形のように遊んでいたくせに。……ごめん、スケベじゃなくてエロいな。うん、恵美はエロい」

「言い直さなくてもいいから!！」

だが、からかう程度ならできる。いや、からかわないと昨日の屈辱を忘れることなどまったくできないため、もう少しだけいじらせよう。

「明、昨日はおれの女装姿に興奮していたよな」

「だ、誰が興奮するか!！」

「おや? 前かがみとなっていたのはどこの誰かさんでしたかねえ?」

「うるさいな!! おまえこそ、メグさんに着せ替え人形状態であったのに、よく堂々とあれを」

恵美はどこから取り出した木刀で明の首に突きつけて、にっこりと笑顔を浮かべる彼女の目を笑っていない。命の危険があると判断した明は何事もなかったように朝食を食べていき、サティエリナとジュリアスは恵美がかわいい女の子ではなく、かわいくて怖い女の子に評価を改めた。

## 国王と謁見

朝食を食べ終えた明たちは、ユグドラシルの王に会うために馬車でフィオナの森に向かっている最中であった。なぜ、ユグドラシルの王に会うためにわざわざ、魔物が巢食<sup>すく</sup>うフィオナの森に行かなければならないのか、それは国王であるギースが常に最前線に立ち、魔物を撃退しているのだ。そのため、彼は城にいることはなく、いつもこのフィオナの森で魔物を退治している。

けれど、本当は違う。彼の娘であるサティエリナいわく、いつも書類の山を減らすことに頭を抱えており、ストレスばかりためていく彼はついに我慢できず、魔物が巢食<sup>すく</sup>うフィオナの森に単独で出撃してしまう。二ヶ月前から、平穏で豊かな森が魔物が住み着くことになってしまい、騎士たちが住民を守るために活躍していたがなかなか成果が出ず、逆に振り返り討ちされてしまうことがあった。

そのため、ストレス発散のためと魔物討伐のためにフィオナの森に攻め込み、一振りの剣で次々と魔物を切り裂いていき、いつの日か、王が前線で活躍することになってしまった。

しかし、フィオナの森に潜む親玉を倒さない限り魔物たちは森に住み、騎士たちは住民と国を守るために防衛線を維持し続けなければならない。このままではらちが明かないと判断したギースは異世界から勇者を召喚することに決断し、彼らに親玉を倒して欲しいと願っている。

「父上が前線に出るおかげでわたしに書類の山が送られるの……はあ」

疲れたようにため息をつくサティエリナは城に戻れば、書類の山と格闘しなければならぬことを思い出すと、もう1度ため息をついてしまう。

明は自分がどれだけ責任のあることを背負っているのかあらためて理解し、腰に差してある剣の柄を思わず握ってしまい、手が震え

ていることに彼は気が付いた。

それに気付いたジュリアスは、彼が恐怖に怯えていることを察した。たった一人に国の未来を背負わせることは、騎士であるジュリアスにとつて許されないこと。自分たちの力不足で他人にこの国の未来すべてを背負わせるのは酷で、責任とプレッシャーで押し潰されないために彼女は震える明の手を取る。

「心配するな、アキラよ。親玉を倒すときは私も一緒に戦うからな」  
優しく包み込むジュリアスの手は暖かく、明の恐怖と不安をゆっくりと和らげていく。彼は自分1人だけではなく、馬車にいる相棒の吉夫、剣道部部長の恵美、騎士のジュリアス、姫のサティエリナという仲間がいるから怖がらなくてもいい。自分だけが責任を背負うことなどない。彼らが一緒に戦ってくれるならば、プレッシャーに押し潰されることなく前向きに進むことができる。国だって救うことができるから 救わなければならないから明はジュリアスのエメラルドグリーンの瞳を見つめ返し、  
「これからよろしく、ジュリアスさん」  
「こちらこそよろしくな、勇者アキラよ」  
友情の証として彼らは握手を交わした。

馬車で揺られ続けてから二時間後にようやく馬車が止まり、目的地のフィオナの森にやっと着いたと安堵の息をついた明は、へっ？と間拔けた声を出した。なぜなら明たちが着いた場所はフィオナの森ではなく、あちこちにテントが張られている場所であった。

「ここはユグドラシルの騎士たちが魔物を国に近づかせないように、  
駐屯場ちゆうちゆうじょうにしているのだ」

ジュリアスが明にそう説明すると彼は、ああ、そうだ、これは防衛線なのか、と理解した。騎士たちの他にも傭兵のような人たちもいて、テントを眺めていた明はあることに気が付いた。旗である。ユグドラシルの旗は一本の樹があり、それに会わせて騎士たちの鎧にも同じシンボルが刻まれていた。

もうひとつの旗にはひとつの剣を中心にして、その上に2つの剣がクロスしている状態は3本の剣を象徴し、明は隣を歩くジュリアスにあれは？ と質問してみた。

「あの3本の剣はこの国の旗とどう違うのか、ジュリアスさんはわかるか？」

「ほう、アキラよ。なかなか目がいいではないか。あの3本の剣はトライアルブレイドと呼ばれるギルドの組織だ」

「トライアルブレイド？ ギルド？」

「すまない。アキラはこちらの世界に来たばかりでなにもわからないうだろう。」

ギルドとは1つの組織にさまざまな人種が加盟し、日々頼まれる<sup>クエスト</sup>依頼をこなすことによってランクを上げていき、金を手に入れることができる場所だ。無論、ランクが上がれば上がるほど得られる富は大きくなると同時に、死と隣り合わせの状況を何度も遭遇することになる。

今回、トライアルブレイドというギルドの組織は、国王ギースからの依頼により多くの者が参加し、見事にフィオナの森に潜む親玉<sup>クエスト</sup>を倒すことが出来れば地位と名誉を与えられるのだ」

ここに参加している者は皆、一刻も早くユグドラシルを平穏な国に戻りたいと願っている、と最後にジュリアスが付け足した一言に明は安心してしまう。全員がユグドラシルのために必死でフィオナの森に潜む魔物と親玉を倒すために力を合わせ、平和を取り戻すために全員がそれぞれの責任を背負いながら戦っていることを。

「私がユグドラシル現国王のギース・ゴラエツト・バルである。異世界から召喚された者たちよ、勇者としていきなりこちらの都合で召喚してすまない。お詫<sup>わ</sup>びとして　我が筋肉を見るがいい!!」

駐屯場にいる騎士たちと冒険者たちの視線が集まる中、明、吉夫、恵美は地に膝を付き、頭を垂れていた。彼らは簡単な自己紹介を済ますと、目の前にいる男性　ギースは自己紹介を終えたすぐに、ふんっ！　と力を込めると彼の着ていた服が内側から破れた。

飛び出してきたのは筋肉隆々とした偉丈夫。肥大した上半身の筋肉を惜しげもなく明たちに晒す

(さら)　ギースはポーズを取りながらさまざまに角度で筋肉を見せつける。短く切り込んだ金髪に、彫りの深い精悍な顔つき、M型の髭<sup>ひげ</sup>をしているのに、さらに筋肉を見せつけるそのインパクトは尋常ではない。

「め、恵美!」

吉夫の隣にいた恵美が気を失ってしまうほどの威力で、吉夫は彼女を支えながら周囲の反応をうかがってみれば、騎士たちと冒険者たちはドン引きであった。冒険者の女性とかは恵美のように気を失うことはないかわりに、直視しないように目をそらしている。

明といえはどう反応すればいいのかわからない、という表情をしていた彼に吉夫は肩をすくめると、明はこれを現実として受け止めるしかなかった。

「どうだ……我がすばらしき肉体は!？」

「父上、母上にあなたがいつものように肉体を自慢していると報告しておきます」

「サ、サティエリナよ。それだけは、それだけは勘弁してくれ……!!」

「いいえ、父上にはしかるべき罰を与えてもらいますので」

様子を見守っていたサティエリナが母上という人物の名前を名乗ると、ギースは肉体を見せつけるのをやめてしまい、彼女に許しを請うがサティエリナは断じて首を縦に振らない。母上　ギースの妻であり、ユグドラシルの王妃である彼女には「お仕置き」を幼い頃からされているため、けっして彼女に逆らうことはできない。鍛え上げた肉体を騎士たちの前で見せびらかしたギースは、たまたまそこに居合わせた王妃に目撃されてしまい、「お仕置き」をされてしまったこともある。

肉体を鍛えること自体問題ではないが、公務をほったらかしにしておいて騎士たちに自慢の筋肉を見せつける彼がいけなかったことぐらい、ギースは理解しているが

「見よ、我が肉体を！！」

やはり、見せつけないと気が済まないのだ。

これではらちが明かないと判断した吉夫は、恵美を抱えてその場からこっそりと離脱し、明も彼と同じように逃げたかったがサティエリナから、

「父上、城に帰ったら母上から「お仕置き」を受けてもらいます」

「お仕置き」よりも筋肉だあああああ！！」

と叫ぶギースが着ているズボンを破る捨てると、女性たちは悲鳴を上げながら去って行き、男性たちは背を向けて警備に戻っていく。

これがユグドラシル現国王であるギース・ゴラエット・バルの真の姿である。

ギース国王の筋肉露出事件が収まり、だいぶ落ち着いたところでテントで過ごす明たちにジュリアスが明に、フィオナの森で実戦を

しないか？ と提案された。彼はフィオナの森は素人の僕でも大丈夫なのか？ と訊いてみれば、素人でも倒せる魔物とか聞いたからな、なにせ、冒険者たちの新人たちで勝てるというのだ、と自身満々に答えるジュリアスに明は吉夫に助けを求める。

「いいじゃないか。ド素人の明が実戦でなにかを学ぶには丁度いい機会だろう？」

「うっ……」

なにも言い返せない明は言葉に詰まり、あの世界で武術について学べばよかったと後悔してしまう。吉夫は鈴音から槍術について学び、恵美は剣道部の部長であるからジュリアスと互角に戦えるという。朝、明と吉夫が食堂に行く前に彼女たちはお互いが強者だと昨日の内に見抜き、朝から手合わせをしていたと明は聞かされているので、ため息をつく。

「ド素人とは変態も同じだろう？」

明をバカにされたことに腹が立ったジュリアスが吉夫に食いつくと、彼はテントの中を見渡してみた。

テントだというのに、ここはベットやテーブル、洗面器、キッチンに風呂まで整えられているという特別な空間で、サティエリナいわく、このテントは魔導具というのだ。

魔導具というのは、魔法の力がこもった特別な道具という意味で呼ばれている。それを何かに改良できないか、と研究した人たちがいる日、武器に魔法の力を込めることを可能としたため、戦闘にも魔導具が利用されている。

その魔導具がこのテントでもあることに感心しながら、吉夫は部屋にある槍に目を留めた。ジュリアスがこちらに視線を送っていることを感じながら彼は槍をつかみ、鈴音から教わったことを思い出す。ただ槍を振るうことは誰だつて出来るけれど、槍術は違う。正式に教わる技であり、我流でない。

彼は深呼吸すると、鋭い突きを何度か行くと次に槍を横に払うと、ブーン、と空気を裂く音と吉夫の慣れた動作にジュリアスはほう、

と興味を示す。

「ド素人でないとわかった貴様の名前を、変態から馬鹿者に変えようではないか」

「それはいいことだ。まあ、サティエリナは変態と呼ぶかもしれないが……」

「では馬鹿者よ、さっそく私とその槍で戦え」

ジュリアスと手合わせをしている恵美は彼女が戦闘狂だと知ってしまい、明日も彼女を楽しませるために相手をしなくてはならない、と悩んでいた恵美は吉夫にオススメさせる。

「吉夫くん、ジュリアスさんと手合わせしないと私の体が持たない」

「メ、メグミよ、それではまるで私があなたにおかしなことをしていると勘違いされるではないか！……ば、馬鹿者、私をそのような目で見るな。ア、アキラもだ」

「明……おれ、貞操を奪われたくない」

「ああ、それ、僕も考えたよ。しかし……ジュリアスさんが攻めとは……メグさん、今日の夜もがんばって」

ジュリアスをからかおうとして吉夫に続き、明もからかおうとしたが途中で関係ない恵美を巻き込ませたことよって、彼の首元に木刀ではなく、刀が突きつけられる。謝罪よりもどこでこの刀を手に入れたのか気になる明は、ゆっくりと視線をそちらに向けると目が笑っていない恵美がいた。

「ねえ、秋欄くん、私は断じてレズじゃないし、ジュリアスさんもレズじゃないからね」

「は、はいいいい！！」

「ジュリアスさんの場合は戦闘狂だから……ね」

「はつきりと断言しなくてもいいではないか、メグミ！」

「一応自覚していたのね……」

ほのぼのと会話しているメンバーたちにいられることがうれしいサティエリナは、恵美に怯える明がおもしろくて苦笑してしまい、それに気付いた明は笑っている場合じゃないよね！？と彼女に助

けを求めるがサティエリナは一生このままで、と残酷な解答で明を困らせる。

明はそれはないだろう！ と叫び損ねたがサティエリナが笑顔になつてくれただけで幸せになつてしまい、いまの状況など気にすることなどなく、サティエリナの笑顔に彼は見惚れていた。

## フィオナの森

せつかくフィオナの森に来たのに、魔物と戦わないことなど私が許さない！ と午後から強く主張しているジュリアスのバトルマニア魂に呆れてしまった明たちは、仕方なくフィオナの森に行くことにした。その際に姫であるサティエリナが同行することに疑問を覚えた恵美が大丈夫なの？ と心配したが、何故かジュリアスが自信満々にサティエリナの凄さを語りだす。

サティエリナは姫として、ただ守られるだけの立場が気に入らなかつたため、母である王妃から時間がある時のみに魔法について教えてもらい、退屈であれば魔法について勉強していたら いつの間にもユグドラシルの魔法姫と呼ばれるようになった。

しかし、サティエリナは魔法だけでは満足しなかつたのか、今度は剣術について学びたい、と専属騎士のジュリアスに頼むと 姫様にそんなことを教えられません！！ と抗議した。姫と騎士の間には身分の差があるため、ジュリアスは彼女にもしものことがあれば と想像しただけで彼女はその場で泣いてしまったという。

父であるギースと母に相談したサティエリナは、母からあなたが望むのなら好きなようにしなさい、とギースに‘お仕置き’をした後で彼女が告げた。彼らの間になにが起こつたのか、すでに予想済みだ。サティエリナは、ギースが娘には私のようになってもらおうぞ！ とか言っていたかもしれない。

以来、サティエリナはジュリアスから剣術について学び、加えて魔法まで習得していた彼女の實力はジュリアス並という。

「ジュリアスさんが泣いたって……想像できないな」

「ア、アキラよ、私が幼い頃の話であつてけつして三年前のことではないからな！！」

「……そうか、三年前だつたのか」

「ば、馬鹿者のせいだ！！」

墓穴を掘ってしまったジュリアスは無言を貫く吉夫のせいにしておき、これ以上過去の話をサティエリナから暴露される前に話題を恵美に振るう。

「ところで、メグミの腰にあるのは……剣なのか？」

恵美の腰に差しているのは刀と呼ばれるあちら側の武器であるが、そんなことも知らないジュリアスとサティエリナに彼女は鞘から抜いた。始めてみる刀に目を奪われたジュリアスは恵美からどうぞ、と差し出されたが、彼女の愛用の武器に触れることをためらう。

「どうしたの？」

「うむ……それはメグミの愛用の武器であろう？」

「そうだけど……」

「……メグミの武器は細いから……壊れてしまいそうで怖いのだ」「そんなことを気にしていたの？ ジュリアスさん、いいから握ってみてよ」

鞘に収められた刀を無理矢理渡されたジュリアスは仕方なく柄を握り、ゆっくりと取り出していくと剣にはない軽さに驚いた。これが刀なのか、と納得したジュリアスは刀を鞘に収めて持ち主の恵美に返し、サティエリナに刀を作りませんか？ と提案しだす。

サティエリナはジュリアスが刀のことを気に入ったとわかり、恵美にどうやったら作れるのか？ と疑問をぶつけてみると、彼女はそこまで知らないと答え、それから刀と剣の良さと悪さについて語りだす。ジュリアスも彼女の話に便乗し、サティエリナは微笑みながら彼女たちの話を聞いて意見を述べる。

目の前で3人の女の子が楽しそうに会話を弾ませていることに、周囲を警戒している吉夫はフィオナの森にいるのに緊張感がないと嘆息する。隣を歩く明がサティエリナに釘付けであることに、これは惚れたかもしれないな、などと思った。

なぜなら、明の場合は本当に好きな人としか付き合わないという理由を前提にしているが、彼だつて気になる女の子が1人や2人ぐらいいることを吉夫は気付いる。よく彼からどうやって彼女と話し

かければいいのかと相談されたこともある。

気になる女の子が目の前を通る時には、必ず明はその娘に目が釘付けになってしまう癖があるので、吉夫は彼がサティエリナに惚れているかもしれない程度に留めておく。そのほうが明をからかいやすく、彼の相談相手になれるから、いまは温かい目で優しく見守るしかない。

「ど、どうした、よひお」

視線に気付いた明は動揺しているのか舌をかんでしまい、苦笑する吉夫はなんでもないと返すと、彼は安堵の息をついた。サティエリナに惚れているかもしれないと思っていたが、彼が安堵の息をつくからこれは惚れたな、と確信した吉夫。これからの2人をどうやってくつつけようか悩んでいれば、頭上からギギツという生き物の声を聞いた。

上を見上げてみれば全身が緑に染まり、一メートル前後の大きさである生物たちの顔は醜く、手にしたナイフ、または棍棒で一斉に襲い掛かってきた。ジュリアスから、これがゴブリンと呼ばれる魔物のことをだとあらかじめ説明されていた明たちは驚いた。彼らが着地する前に、と我に返った吉夫は背負っていた槍で宙に浮かぶ一匹のゴブリンを貫き、地面に着地する前に彼は周りのゴブリンを槍で払いのける。

「うん、槍だつたら誰にも負けないな」

静かに呟いた吉夫は明に自分の身は自分で守れと伝えたと、ゴブリンの群れに突撃していき、槍でまた一匹貫いた。

彼のためらいのなさにわかっていたが、まさかこれほどまでためらいもなくゴブリンの群れに攻めるとは予想していなかった明は吉夫らしいと心の中で苦笑する。隙だらけの明の目の前に棍棒を振り下ろすゴブリンに気付いた彼は慌ててよけると、腕に棍棒がかつただけで済んだ。続けてナイフを手にしたもう一匹が斬りかかるがそれもかわし、一度距離を取った明はいつものように 不良と喧嘩ケンカしていた時のように体を動かす。

「……いくぞ」

自分に言い聞かせるように小さく呟いた明は鞘から剣を抜き、まともな訓練すらしたこともない彼はただ振りますことしか知らないけれども、そんなことを承知している明は近づいてくるナイフを持ったゴブリンに対して、剣を大きくフルスイング。まるで野球のようにバットを振った明の攻撃に反応できなかったゴブリンは、成す術もなく首を深く切り裂かれた。

首から大量の血を流すゴブリンが苦痛を感じることもなく絶命し、明はこれで一匹と数えて、もう一匹のゴブリンを見据える。

仲間を殺されたことによって目が血走り、棍棒を力任せに振るゴブリンの攻撃をよけるのはたやすくい。何度か同じパターンを見せつけられた明は剣をフルスイングではなく、上から勢いよく剣を振り下ろす。

素人の明であっても剣を勢いよく振るえばかわされることだつてあるが、いまのゴブリンは頭に血が上っている。そのため、明の一撃はうまくゴブリンに決まった。

「はあ……はあ……はあ」

荒い息を整える明は吉夫たちのほうを見れば、ちょうど吉夫が最後のゴブリンの頭を槍で貫いていた姿にすごいなと心の中で感心する。ゴブリンの群れに突撃したくせにかすり傷すら負っておらず、地面に横たわる死体には頭か心臓しか穴が開いていない。意味するのは、吉夫が槍でゴブリンたちの急所しか狙わずに勝ったということ。他にも、剣で斬られたり刀で斬られたりした死体も転がっていた。

「おっ、明。そっちはどうだった？」

「ギリギリだったよ……一歩間違えていたら死んでいたかもしれない」

「言ってるな。おれさ、おまえの戦いを観察していたけどけっこう危なかったし、ゴブリンがもう一匹いたら確実にリンチされていたな」

「……おまえ、余裕だったみたいだな」

「まあね。恵美たちが手伝ってくれたからな」

剣を鞘に収めた明はジュリアスにこれから剣術について教えて欲しいと頼み、ジュリアスは快く引き受けた。その時にサティエリナがむつと不満顔をしていたことに吉夫と恵美は苦笑し、彼らにどうしたの？ と問いかける彼女に二人そろってなんでもないと返す。

フィオナの森に現れる魔物がある程度倒し、素人であった明は剣を振るうたびに少しずつ動きがよくなってきた。数時間の間に明はかすり傷や打撲などの軽傷を負い、吉夫といえば腕を狼にかまれただけで、他の3人はサティエリナのサポートによって傷らしい傷などない。

剣と比べて槍はリーチが長く、接近戦を挑むゴブリンや巨大な蜂ハチキラービー、森に生息する森狼ワイルドウルフのほとんどは槍に貫かれてしまい、吉夫に近寄ることさえ許されなかった。だが、それでも彼にたった一撃を与えることが出来た魔物 全身が銀の体毛お毛に覆われ、目は海のように青く染まった狼はどの魔物よりも気高く、圧倒的な強さを吉夫に見せつけてくれた。

鈴音から教えられた槍術で白銀の狼を倒そうとしてもすべてかわされてしまい、狼は吉夫に一撃を喰らわせただけで攻撃してこなかった。あとは吉夫がひたすら攻め、狼はひたすらよけていた。

何度か同じことを繰り返していると狼が自ら身を引いて、吉夫たちの目の前から去っていった。あの時の気持ちは、とても悔しく、同時に自分よりも強い相手がいることに喜びを感じた。もっと強くなりたい、と純粹に彼は強く思った。

彼と同じように明も強くなりたいたと思った。吉夫が怯えることなく白銀の狼に立ち向かった彼の勇気。明はメンバーの中で一番弱いと実感したから。サティエリナは魔法で身体能力の向上と遠距離の敵に魔法を放ち、ジュリアスは剣で彼女に近づく魔物を切り伏せ、恵美は居合いによって一瞬で斬り捨てる。

だからこそ、明は彼らの足手まといにならないために、これからずっとフィオナの森で鍛錬でもしようかと本気で悩んでいると吉夫が自分の肩を叩き、明るく話しかけてきた。

「気にするなよ。おまえはド素人、おれたちは熟練者、という違いだから焦ってもしょうがないぜ」

「さすがは僕の相棒だよ。何でもお見通してみたいだな」

「これぐらい当たり前だろう。それに、おれたちが簡単にゴブリンとかキラビーを倒せたのは、あいつらが弱かったただけであって、けっしておれたちが強いわけではないぞ？」

「うむ。馬鹿者の言う通りに魔物は弱く、それも冒険者たちの初心者でさえ倒せる相手であったからな」

吉夫の言葉を肯定するジュリアスの言葉は間違っていない。今日、彼らが戦った魔物のほとんどは冒険者の初心者でさえ倒せる最弱の弱さであったため、勇気があれば誰だって倒すことができる。

「しかし……馬鹿者よ、よく白狼と互角に戦えたな。あれは私でさえ勝てないランクAの危険な魔物だぞ？」

「白狼とはあの白い狼だよな。なあ、ジュリアス。ワイルドウルブ森狼と白狼の違いについて詳しく教えてくれないか？」

「もちろんだ。」

貴様が先程戦ったのはフィオナの森に生息する狼であり、昔からこの地を守ってきた主だ。白狼は他の狼とは違い、争いを好まずに過ごす大人しい性格であるが奴のテリトリーに侵入すれば、遠慮なく牙を向けてくる。

ランクAということまで説明してもいいか？」

「頼む。ジュリアスだけが頼りになる」

「ば、馬鹿者め、お、おかしなことを口走るではない。

おほん、話がそれだな。ランクAとは階級という意味であり、それによってどれくらい危険なのかということを示すのだ。これまで、私たちが倒してきたゴブリン、キラービー、森狼ワイルドウルフは初心者でも倒せるということで最低のF。

それから危険度が上がることによってE、D、C、B、Aと続き、さらにAの上にSというランクがあるのだ。これまで、Sランクになれた人たちなど世界に3人ほどしかいないため、彼らの名前を知らない人などいない。

さて、ここまで説明すればもう馬鹿な馬鹿者にも理解できるだろう？」

「うわぁ……おれ、よく生き残ることができたよな。とても運がよかったよな。……あれ？ どうしてフィオナの森の主がランクAなんだ？ おかしくないか？」

吉夫の疑問をぶつけられたジュリアスは彼の言葉を肯定し、思考してみても彼女には答えが見つかることができずに助けをサティエリナに求めた。

「おそらく……白狼に挑んだ愚かな冒険者たちが振り返ちにあったせいでしよう」

「そうか、それならランクが自然にAと上がる訳か。フィオナの森の主に喧嘩を売るとは……命知らずの馬鹿もいるんだな。ありがとう、ジュリアス、サティエリナ」

すなおに礼を言う吉夫に拍子抜けしたジュリアスとサティエリナは、数時間の間に彼が打ち解けてくれたことだということに気付いてしまい、これからもよろしくお願ひしますと返した。最初に会った頃と比べて、吉夫はこちらのことを警戒していたが、いまでは普通に話しかけることができる。

フィオナの森に現れる魔物と戦っていく内に、お互いの弱点をカバーしてきた吉夫とジュリアスには目に見えない信頼関係が結ばれているせいか、ずいぶんと話が弾んでいる。サティエリナはたまに口

出しをするとジユリアスは赤面してしまい、それに吉夫はあえてかわらずに聞いていない振りで過ごす。

「……あつ」

と呟いた明に吉夫は反応し、彼に顔を向けると気が付いたことを口にする。

「この森にいる主白狼はけっこう強いのに、どうして魔物の親玉を倒さないのだろうか？」

「倒さないじゃなくて、倒せないとおれは思うけどな。なつ、サテイエリナ」

「……はい。」

白狼はフィオナの森の主としてもつとも強く、そこら辺の魔物には負けることなどありませんが……いま、ここに住み着いている魔物の親玉は白狼以上の強さを誇ります」

隠していても意味はないと悟ったサテイエリナは彼らに真実を伝えておいた。二ヶ月前に、国王であり、父であるギースが魔物の親玉と互角に戦ったが傷を与えることができず、撃退しかできなかったと報告されている。

いまではあの親玉はフィオナの森の最深部に姿を隠し、そこまでたどり着いた強者のみしか相手をしないうという変わり者であるため、彼らはフィオナの森の外から出ることなく、魔物に指示をしてユグドラシルを落とそうとしている。

「……これから大変だね」

「これから大変ではなく、これから大変なんだよ。アホ明」

「あはは、本当だよな。よし、これからはずっとフィオナの森で訓練するか」

「ずっとって……おい、明。まさかここに泊まっていくとか言わないだろう？」

「もちろんだよ。何か不満か？」

「……少しはサテイエリナのことを考えるよ。まったく、あいつはおまえとの時間を大切にしたい……はずだから……大人しく城に戻

るぞ」

サティエリナという言葉聞いた明の顔はみるみる内に赤く染ま  
つていき、ヒットしたことに喜ぶ吉夫は秘密にしてやるからな、へ  
たれ勇者と約束しておいた。

## 罰ゲーム

「……」  
朝、いつも通りに目覚めた吉夫は、現在どのようなリアクションをすればいいのかわからなかった。

彼はベットから体を起こすと、この部屋にある鏡の前までまっすぐ向かうとこれが夢ではないか、と疑いたくなかったが、彼の身に起きていることは現実であった。

ぺたぺたと自分の体を触った吉夫は目にかかる銀色の髪をどうしようかと悩み、腰まで伸びるそれに彼はため息をついた。

たしかに、一度はこうなってみたいやあれしてみたい、と豊かな想像力を働かせたことのある吉夫は、夢ではないかと思いつながら頬をつねる。痛い。やはりこれは現実である。信じたくはないことだが、これは彼の身に起きている出来事であった。

絹糸のように細い白銀は腰まで届き、目は白狼と同じ海のように青く染まり、視線を少し下げれば山のように大きく膨らんだ胸がある。おまけに頭の上には耳がびくびく動き、尻尾まで生えている。顔つきは元のままなので、顔以外すべて女性化してしまった吉夫は一度は体験してみたい性転換に成功したことに喜ぶよりも、どうしてこうなったか思考しだす。

昨日はフィオナの森にいる魔物を倒すことで実戦とはどういうことか学び、同時に素人の明は剣に慣れるまでということをしていた。城に戻ってからは夕食を食べ、ヘタレの明をサティエリナと会話させるために恵美とジュリアスの話し相手となり、その間に2人の仲を進展させようとしたがうまくできなかった。出会って間もない男女だから、という訳ではなく、ヘタレ明が口を開かないせいでもあり、サティエリナも話す側ではなく聞く側であったので失敗した。それからはベットで一夜を過ごしたら、いつの間に女性化してしまっただけだ。

「……これ、重いな」

山のように膨らむ胸に視線を落とした吉夫は、下着とかも着ないといけないのかと口にすると自殺したい衝動にかられた。男が女性の下着を身にまとう。彼としては恵美に女装されるよりも屈辱的で、生きている中で一番恥をかいてしまう行為であった。

人であれば男女関係なく下着を身にまとうことが当たり前だが、吉夫の場合、精神は男性で肉体は女性なので女性の下着に手を出すことをためらってしまう。女性の下着に興味ないと言えば嘘になるが心まで女性になってしまう、ということが起きそうで怖い吉夫はいつまでも悩んでいても仕方ない、と結論を出し、最終的には心まで女性になってもおれはおれらしくすればいい、と決めると気持ちが楽になる。

気持ちの整理が出来たところで鏡に映る自分を見ると、この姿を見た鈴音はどう反応するのかなどと思い浮かべただけで口元に笑みが浮かぶ。高確率で腹を抱えて、あははっ、よ、よっしーがついに女の子になっちゃたなあ。これでうちとよっしーは姉弟やなくて姉妹や！ と言いそうだ。

「……っっ」

ふと思考にノイズが走り、顔をしかめる彼はあふれてくる情報を、記憶を、過去を感じてしまった。

目の前には鏡があったはずなのにいつの間にも木となってしまう、周りを見渡してみると部屋という空間から森という世界に塗り替えられていく。森に囲まれた吉夫は頭に響くノイズに耐えながらも、木々に囲まれた場所で遊ぶ幼い2人の子供を発見した。

彼らの顔にはもやがかかって性別すら見分けることができないはずなのに、なぜか吉夫にはどちらが男の子で、もう1人が女の子なのかわかってしまう。2人は楽しそうに木々に囲まれた場所で遊び、飛んだり、泣いたり、怒ったりとコロコロと表情が変化していく彼らがなぜか懐かしく、なぜか悲しい。

どうして懐かしく、悲しいのか理解できない吉夫は彼らが向かい

合い、小指をからめている姿に一層頭痛が増した。

『ねえ、リーン。これって何のおまじない？』

リーンと呼ばれた女の子は男の子の名前を愛しげに呼び、彼の頬に触れる。

『これはね、わたしたちが離ればなれにならないためのおまじないだよ、ヨシユア』

『そうなの？ いつまでもぼくたちが同じ時間を歩める……ってことだよ？』

『うん。でもね、これはただのおまじないじゃなくて魔法と呼ばれる特別なおまじないなの。悲しい時もつらい時も、不安な時もうれしい時も、生きる時も死ぬ時も、全部ぜんぶヨシユアと一緒に過ごすよ。 我、この者と契りを交わす者なり』

凜とした声を響かせるリーンに反応するように魔法陣が浮かび上がり、魔法と呼ばれる力のことを知っているかのようにヨシユアは驚かない。

『我はこの者と永遠の契りによつて、未来永劫一時も離れることなく傍に居続けます。死が2人を隔てたとしても、魂は常にあなたと共にいることを、リーン・トルカットは誓います』

『ヨシユア・トルカットも誓います』

結婚式で夫婦が永遠の愛を誓うようにこの姉弟は同じように誓いを交わし、弟であるヨシユアと唇を重ねるリーン。幼い姉弟が唇を離すと、リーンは彼から目をそらし、ヨシユアは彼女にバカと返す。

ここまで眺めていた吉夫はリーン、ヨシユアという名前が懐かしいと感じたが、なぜそのような思いを抱くのか彼自身さえわからない。ふうと大きく息をついてみると、いつの間に森と幼い子供たちはいなくなっていたことに驚きはしない。白昼夢とは呼べないが幻と呼ぶにはふさわしい現象に、ファンタジーだよなあと呟いて鏡に映る自分と睨めっこする。

数十分後。

彼を起こそうと部屋に訪れた恵美は目の前に見知らない女性がい

たのに、吉夫だと見抜き、彼女は着せ替え人形のように彼をもてあそぶ。

朝食の時に全員がそろうのを利用して吉夫は、ユグドラシル城の食堂に集まった明たちに朝、起きたらこうなったと一言で説明しておいた。明は吉夫が女になったのかチェックするとか言い出し、女性なら誰だつてある胸に手を伸ばそうとしたら遠慮なく殴られた。

「アキラよ……女性の胸に軽々しく触れようとするではない」

吉夫が女性であることを肯定しているジュリアスは、彼に注意しておくて反論しだす。

「中身は男で、外見は女の吉夫に触れてはいけないのか!？」

「無論だ。馬鹿者の実った果実というのは、男であれば一度はさわつてみたい場所だろう? アキラは彼の胸が気になってしょうがないだろう?」

「普通に気になるに決まっているさ! ジュリアスさんみたいに大きく熟れた果実を、吉夫が体で再現しているから……触れないと損するだろう!？」

欲望を丸出しにした明にジュリアスは羞恥に耐え、ふとサティエリナのほうに目を向けてみると、彼女は自分の胸に触れていた。大き過ぎず、小さ過ぎずの形のよい胸であることを知っているジュリアスはサティエリナをなぐさめたいが、かえって逆効果になることを承知している。なぜなら、ジュリアスの胸はサティエリナよりも大きく、質量もたっぷりあるから。

ジュリアスが自分のことをなぐさめようとしていたことを悟っていたサティエリナは、どうして胸のことで落ち込むのか、と疑問を

抱いた。普段なら、このような些細なことなど気にすることなどないはずなのに、明たちがこちら側に来てから気にするようになってしまった。

「……対等な立場だから、かな」

これまで、自分と気軽に話ができる相手はジュリアスぐらいしかなくて、寂しかったことぐらい自覚している。姫だから、という理由で誰にも近づくことができず、また、サティエリナも自分から他人に話しかける勇気がなかった。

だから、勇者として召喚された明たちとは同じ立場で気軽に話ができるから、彼女はいまの生活を気に入ってしまった。フィオナの森に巢食う親玉を倒したあとは、そこから先、想像したくないサティエリナはその時が来るまで、いまの時間を大切にしたい。

「サティエリナさんって実は秋欄くんのこと気になるの？」

自分しか聞かえないように話かけてきた恵美に彼女は驚いてしまい、赤面させるサティエリナはつい彼女を睨んでしまう。

「どうしてそうなるの？」

「秋欄くんに熱い視線を注いでいるから……普通はそうなるよ？」

「……わ、わたしがアキラさんに……？」

「そっか。サティエリナさんはその方面には疎いということなのね」  
納得した恵美はそれ以上なにも言わず、サティエリナはなにが疎いかわからずに、明のほうを見てみるとなぜか胸が高鳴る。いままで感じたことのない感情に彼女は困惑するものの、不思議と安心してしまうのはどうしてだろうか。いまはこの正体がわからないサティエリナは胸の中に閉まっており、もう一度明のほうに向くと、吉夫が羞恥に頬を染めて彼を殴っていた。

「……メグミさん、なにが起きたの？」

「えーと……秋欄くんが吉夫くんの胸を触れてしまったせいで、彼は殴られたってこと」

「……どうやってたら、そんなことできるの？」

「さあ……？」

2人が呑気に話していると吉夫はこつちを向き、サティエリナと明を見比べてからとある提案を試してみた。それは明がもつとも望むことでもあり、恥ずかしいことでもある。

「明！！ おれの胸を触った罰として、サティエリナの頬にキスしろ！！」

「ば、馬鹿者よ。それはさすがに……」

止めようとしたジュリアスに吉夫は彼女に耳元に囁くと、納得してくれた。彼女は主であるサティエリナにどうか、アキラにキスをされてはいかがでしょうか？ と提案していると、彼女は首を縦に振った。

ちなみに、吉夫がジュリアスに囁いたことは、明とサティエリナの2人を付き合わせるためには、と理由を述べたせい。普段の彼女ならば、吉夫の提案など受け入れないが、サティエリナと明は気が合うと見抜いていた。だから、今回ばかりは受け入れるしかなかった。

「さあ、明。ここでキスしなかったら男の恥だぞ？」

向かい合って座る明とサティエリナを眺める吉夫は、ニヤニヤしながらどうなるのか見守っていた。ジュリアスと恵美も、じつと2人を凝視することによって見られていることを意識させる。

いままで、一度も女の子とキスなどしたことない明は戸惑う。けれども、せっかく吉夫が用意してくれたこの舞台を台無しにするのはもつたいたいから、ゆっくりと彼女の顔に近づく。

「……長いな、ジュリアス」

「本当だな。まったく、アキラはヘタレであるな。馬鹿者よ」

「ああ。ゆっくり近づくのはいいが、時間をかけ過ぎている。ジュリアス、せっかくだから国王ギースの強さについて教えてくれ。あとは親玉についてな」

「うむ。」

陛下はユグドラシルの王になるまで、王族でありながらも毎日肉体を鍛えていた。理由は、退屈でやることがないから、というのだ。

まあ、王位継承者をすでに受け継がれることを確定されていたから、陛下はあのようなことをしていたのだ。そこで、彼は当時の王に、騎士を目指してもでしょうか？ と訊いてみるとあっさりと許可してくれたが……周囲は反対であった。時期後継者が死ぬことがあれば、といういうことで周囲の人たちは不安であったが、それも杞憂に終わる。

騎士を目指すことになった国王の肉体はよりたくましく、より頑丈になっていくだけではなく、最前線で活躍する貴族として名が知られていく。退屈であった陛下の毎日は目が回るほどの忙しさで、あわただ慌しい日々を送っていたが、ある日、当時の王が急死してしまう。

時期後継者であった陛下は王の後を継ぎ、ユグドラシルという国をよくしようとした矢先に魔物が攻め込んできた。普段ならば魔物など近寄らないはずなのに、王が亡くなるのを狙っていたかのようにユグドラシルへ雪崩れ込み、国中がパニック状態であった。

あの時の陛下は王として民を守るか、騎士として戦うべきかと頭を悩ませていた時、幼い頃からの婚約者 姫様の母上が、彼に自分の好きなことをしなさい！ と叱咤しったしたのだ。

彼女によって目が覚めた王はユグドラシルを守るために立ち上がり、一振りの剣で住民を襲う魔物を次々と切り裂いていく。たとえ、剣が折れたとしても王は自慢の肉体で押し返し、最後には最前線まで拳のみで進行した彼のおかげでユグドラシルは守られたのだ。

この時に名付けられた彼の2つ名は鋼のギース。由来はどれだけ押されてもけつして引くことなく、ひたすら前に進む彼の姿が印象的であったという」

ふうと息をついたジュリアスに吉夫はお疲れと労いの言葉をかけておき、いまだにサティエリナの頬にキスできない明に呆れた。ジュリアスも彼と同じように呆れていたが、吉夫に説明できたことに満足していたので幸せであった。

「次もいいか？」

「うむ。しかし、これは私が実際に見たことではないからな。」

親玉については……確か、1人は頭に一本の長い角は生やし、国王と互角に渡り合える人物。もう1人は、頭に二本の長い角を生やした人物である」

「人物……？ 魔物じゃなくて？」

「すまない……そこまでは知らない」

「いいや、いい参考になったよ。……さて、邪魔者のおれたちはさつさと去りますか」

明がサティエリナにキスするまで眺めていたら、きっと日が暮れてしまうかもしれないから吉夫は食堂から出て行く。彼と同じ気持ちである恵美とジュリアスも同行し、二人きりになってしまった明とサティエリナは苦笑してしまう。

いままで長い時間をかけていた明は、人がいなくなると迷うことなく彼女の頬にキスをする。

「アキラさんのえっち……！」

うれしそうに、または恥ずかしそうに彼に告げたサティエリナは頬を片手で隠し、明から逃げるように食堂から出て行く。

残された明は、

「吉夫、ありがとう」

と、ここにはいない相棒に感謝していた。

## もみじはスケベの証

ユグドラシル城にある訓練場で明と吉夫はそれぞれの武器を構え、審判であるジュリアスの合図が出るまで2人は向かい合っていた。ついこの前まではただの高校生であったはずの明の顔つきは、何度も魔物との命がけの勝負をしてきたおかげで、たくましくなっている。加えて、3日間もジュリアスと共にフィオナの森で過ごし、彼女から剣術を教わったので人並みに強くなれた。

対する吉夫は、3日前から肉体が女性化してしまったおかげで、そのまま生活するしかなかった。博学であるジュリアスでさえ彼の身に起きたことなど知らないため、彼女は助言すらできなかった。解決法もないので、仕方なくメイド服を身にまとっている。理由は、恵美がせっかく女の子になれた吉夫くんには、いっぱい奉仕してもらわないといけないから、ということと彼はメイド服を着る羽目になったのだ。

ちなみに奉仕とは、恵美とサティエリナを起こすことと、彼女たちの髪を梳とくことだったりする。他にもいろいろあるが、ここから先は吉夫にとつて口が裂けても言えないことなので自重しておく。

「……行くぞ」

「おう、いつでも来い。って、早いな！」

ジュリアスが開始と告げると、明は一瞬にして吉夫まで間合いを詰めてしまい、あとは剣で彼の槍を斬つてしまえば勝ちである。だが、吉夫はニヤリと不敵に笑うと振り下ろされる剣を槍で防ぎ、明を弾き飛ばした。

「ははっ、強くなったじゃないか、明！」

明の成長を喜んでいることを示すように吉夫の尻尾がふりふりと動き、彼は槍を構えるとまっすぐに突撃してくる。弾丸のように向かってくる銀の疾風に明は舌打ちしてしまい、受け止めるために最近覚えた風の魔法を唱えようとしたら

吉夫の姿が視界から消え

た。

「なっ!？」

驚きを隠せない明は周囲をすばやく見渡してみると、どこにも彼の姿などなく、上か! と思って顔を上げてみるがそこにもいない。どこにもいない吉夫にどうやって対処しようか、と警戒しながら考えていると、ブウン、という空気を切り裂く音を後ろから聞こえた。すぐさまにその場から飛び退くと、ドンッ! という音が響いた。

さっきまで明がいた場所に吉夫が立っていたが、彼の姿はさっきとは異なっていた。全身から雷をバチバチと放出させており、槍を何度か振るうと武器まで雷を帯びていく。

もしも、あれを喰らったら 打撲ではなく、骨折してしまうかもしれないと、想像しただけでゾツとする。いまは戦闘中であると頭を切り替えた明は吉夫に斬りかかるものの、彼の姿は一瞬にして消えてしまう。

周囲を見渡したところで彼が見つかるとは思っていない明は目を閉じ、訓練場にある音すべてを耳で拾っていく。これなら、目で追えなくても耳で聞こえる。

タンツ、タタツ、タンツと軽快なステップを刻む音が吉夫である とわかる明は、ひたすらその音に耳を傾ける。タンツ、タツ、タンツと刻んでいたステップが早くなり、不意に音が消えた。かわりに聞こえたのは、ブウンと空気を切り裂く音。左斜め上であると音だけで判断できた彼は風を剣をまとわせ、そのまま斬り上げる。

金属が激しくぶつかり合う音が響き渡り、明が左斜め上に剣を斬り上げた場所に、目を大きく見開かせた吉夫がいた。彼は明が自分の攻撃を受け止めると、予想していなかっただろう。

いったん距離を取った吉夫は、すぐに明が距離を詰めようとする ことにうつつとうしくなる。近づけば反撃され、離れたら追いかけてくる。何度もこのようなことを繰り返していると、彼は明の攻撃パターンを見抜いたので、そろそろ終わらせようかと静かに呟いた。

斬りかかる明の攻撃をひたすらかわしていた吉夫は槍で彼の剣を

防ぎ、槍がピシリと嫌な音を立てたが気にしている場合ではない。このまま押し倒そうとしてくる明は力任せに槍を斬ろうとしたら、吉夫が雷を一気に放出させた。

視界は一瞬にして白く染まり、なにも見えない状態であったが、明は耳を利用することによっていつでも次の行動に入ろうと準備していた。ジャララという音が聞こえただけで、それ以外、なにも起きない。

「……？」

なのに、予想していた攻撃はいつこうにやってくる気配はなく、回復した目で恐る恐る開いてみた。目の前には、頭から耳と尻尾を生やした銀髪蒼眼の美女がメイド服を身にまとっていた。これはこれで、彼が口が開かなければ誰だって美人と口にするが、生憎、中身は男なのでほめられてもうれしくないだろう。

「いやらしい目を向けるな、ヘタレ勇者」

「いや、ついおまえに見惚れて いえ、なんでもありません」

吉夫の手に収束していく雷が怖くなった明がすなおに謝罪すると、彼はそれを消してくれた。安心した明はもう一戦するために体を動かそうとすると、全身に黄色の鎖がからまっていることに気がついた。風の魔法を発動させて、鎖を切り刻もうと試すがなかなか斬れない。

「ああ、1つだけ言い忘れていたぞ。おれが作った束縛用の鎖はそう簡単に切れないからな」

「これも……魔法だよな？」

「そつ、サテイエリナが相手を捕まえる時に、と言って教えてもらったのさ。その結果がいまの明の状態なんだよ」

「……この鎖が切れないってことは、僕の負けだよな」

「そうなるよな。……じゃあ、あと4回もおれと手合わせしろよ？ 一回だけでは物足りないし、徐々にジュリアスと手合わせしたいから……な」

メイドをしていると体がなまってしまふからな、と最後に付け足

した吉夫は明の鎖を解き、彼に遠慮なく襲い掛かる。

それから、明と4回もの手合わせを終えた直後にジュリアスは乱入し、彼女は貴様と戦いたいぞ、馬鹿者！と宣言してから吉夫に迷うことなく剣を向ける。

「フィオナの森に行きましょう。ヨシユアのことについて、父上が誰よりも詳しいはずよ」

昼食を食べ終え、吉夫に髪を梳かれるサティエリナが提案してみると、全員は2つ返事で承諾してくらた。ちなみに、サティエリナが吉夫のことをヨシユアと呼ぶのは、いつまでも変態さんと呼ぶわけにはいかないから、という理由。その時に吉夫はどうやって呼んでももらおうか、と悩んでいたらヨシユアという名前が頭の中に浮かび、迷うことなく彼女にそう呼んでくれと頼んだ。以来、サティエリナは彼のことをヨシユアと呼んでいる。

「……嫉妬してしまうよな」

馬車の中で向かい側に座る明とサティエリナが会話を弾ませており、3日という時間を埋めるつもりなのかいつもよりも距離が近い。お互いの指が触れるか触れないかという差がもどかしく、どちらかが触れなければ2人の距離は縮まらない、ということに吉夫は怒っている。けれども、見ているこちらが微笑ましいからそのままの状態をキープしてもいいので、許しておく。

自分の両側に座る恵美とジュリアスの様子をうかがってみると、フィオナの森にいる魔物は強いとか、吉夫くんのメイド服は萌えるとか、熱く語り合っていた。前者のジュリアスは戦闘狂だからよしとしておき、後者の恵美が語る内容は自分にとって恥ずかしいので

聞こえない振りをしておく。

「ヨシユア……か」

いまさらながら、サティエリナに名前の変更を求められていたのに、なぜ吉夫と口にしなかったのかと疑問を抱く。あの時、吉夫という名前が出る前にヨシユアという言葉が自然に紡がれた。理由などない。だが、ヨシユアという名前は何故かなつかしいのは、どうしてもだろうか。自分でもわからないが、こっちのほうが存在している、という感覚に襲われるため安心できてしまう。

「馬鹿者よ、貴様の耳と尻尾はどうしたのだ？」

隣に座るジュリアスが手を怪しく動かしながら、問いかけてきておかげでなにがしたいのか予想できた。耳と尻尾を隠すことができようになるようになった吉夫は、全身の力は抜くと、頭から耳、尻から尻尾が生えてくる。

「さ、触つてもいいか？」

「……好きにしる」

「で、では。……おお、このもふもふ感はたまらないぞ！」

耳を丁寧に触れるジュリアスの手つきは優しく、温かい。このままずつと彼女に触れられてもいいが、だんだんとくすぐつたくなるのが難点である。どうして女の子はこの耳と尻尾を触りたがるのか、吉夫には理解できない。恵美とサティエリナもジュリアス同様にも耳をもふもふしながら気持ちいいとコメントしていたので、余程耳と尻尾に魅力があるだろう、と彼は結論を出している。

「しかし……馬鹿者よ、貴様のメイド服はよく似合っているぞ」

反応したのは、彼をこのようにさせた張本人である恵美である。

「そうだよ。吉夫くんのメイド服はなかなかいいよね？」

「うむ。私も姫様に仕える身だから、誰かに仕えることの喜びを誰よりも知っているからな」

「吉夫くんが私に……。ぶっ、これはこれでいいかもしれひゃい！？」

いけない妄想を展開してしまった恵美が鼻血を出し、さらにその

先のことを言わせないために吉夫は彼女の頬をつねる。いはいいい、と痛みを訴える恵美のことを無視し、彼女のいけない妄想トリガーを引いてしまったジュリアスの頬をつねると、なにをするのだ！？と驚いていた。

「恵美に鼻血を出した罰だ」

「私のせいではないだろう！ だいたい、彼女の想像力が豊か過ぎるのがいけないのではないか？」

「たしかに、おまえの言っていることは正しい。恵美は救いようのないスケベで……。おほん、失礼。スケベではなく、エロだったな」

「わざわざ言い直さなくてもいいよね！？ 吉夫くん」

「ん？ 本当のことを述べただけだぞ、恵美。……おっ、ジュリアスの肌はいいな」

ジュリアスの頬をつねた辺りに手を触れ、輪郭をなぞるようになでていくと彼女の顔が赤く染まっていく。拒否しようとすれば拒否できる。なのに、拒む気にもなれないジュリアスは彼に触れられていることに、うれしくなってしまう。

「ば、馬鹿者。もうよいだろう」

恵美がこちらを睨んでいることに気付いたジュリアスがやめさせようとすると、吉夫は気にすることなく、彼女の頬をなで続ける。

彼の行動が気になった恵美は確認するように問いかけた。

「人嫌いの吉夫くんは……ジュリアスさんのことを気に入ったの？」

「そうだ。悪いか？」

「うっん、悪くないよ。……ねえ、吉夫くんがジュリアスさんのことを気に入っているなら、私もあなたのお気に入りでよね？」

「う、うるさいな、エロ恵美！」

「すなおになれない吉夫くんって実はツンデ ふにゅあ！？」

前触れもなく馬車が大きく揺れると、恵美の向かい側に座っていた明が飛んできた。突然の出来事には対処できず、そのまま恵美に突っ込むと 彼女の胸に顔からダイブしてしまう。明の視界は真っ暗でなにも見えない状況であったのに、顔に当たる感触は気

持ちがよく、鼻腔をくすぐる甘い匂いを味わってしまった。

「おお……これこそ、ラッキースケベというのか。ゲームとマンガでしか起きない現象だと思っていたが……実際に目撃すると、うらやましいの一言だよな、明」

「一体なにがラッキースケベなんだよ、吉夫！？　んなつ！？」

感心している吉夫にツツコミを入れた明がガバツと顔を上げると、彼の視界に映ったのは形のよい胸。大き過ぎず小さ過ぎず、ほどよい大きさであるそれが眼前にあった時点で、明は向かい側に誰が座っていたのか思い出す。数秒で恵美という解答が導きかれ、ゆっくりと顔を上に上げていくと　耳まで真っ赤に染まった二階堂恵美がいた。

「あはは……やあ、メグさん」

「白々しいぞ、明。せめてここは、事故なんだ！　許してくれ！　けっして僕が好きであなたの胸に飛びついたわけではないのさ！！　と笑顔で述べるべきだろう」

唯一、この状況を楽しんでいる吉夫は、サティエリナとジュリアスの明に向ける絶対零度の視線をさらに下げていく。口をばくばくと動かすことしかできない恵美は、これが現実であると理解した瞬間に彼を引っぱたく。

パンツという乾いた音が静寂に満ちた馬車の中でよく響き、明の頬には立派なもみじが完成した。

## もみじはスケベの証（後書き）

だんだんとほのぼの化しているような気がするのは、自分の気のせいでしょうか……？

キャラクター紹介を作りましたので、もしよかったらのぞいてください。

## 彼と彼女の理由

フィオナの森にある駐屯場に着いた明たちは、さっそくギースに会うために彼がいるテントまで女性の騎士に案内されていた。途中で男性たちからハーレムだよとか、修羅場かよとか、勇者も男だよとか、あのもみじスゲーとかいろいろ言われたが、明はすべて無視しておいた。

また、途中で女性たちからあの2人つてもしかしてとか、レズかもしれないとか、あの人とならいいかもとか、同性に思えないとかいろいろ言われたが、吉夫は楽しみながら聞いていた。レズかもしれない、というのは恵美が彼の腕に抱きついている状態なので、そう思われてもおかしくない。

彼女が吉夫に抱きついているのは、明に胸を触れられたことを忘れるようにしているため。けっして、恵美が自分をアピールしようとしているわけではなく、単純に嫌なことを頭の中から追い出そうとしてるだけ。

「……恵美、離れてくれ」

「嫌だよ」

「はあ……好きにしてくれ」

「うん、好きにしてもらうよ」

第3者から見れば2人は同性で付き合っているようにしか見ええない。吉夫は彼女にレズ疑惑をかけてたくなかったが、あらためてレズであると頭の中で訂正した彼は大きく息をつく。

「こちらです、サティエリナ様」

騎士が1つのテントの前に立ち止まり、彼らに気絶しないでください、と最後に女性陣のみ告げると去っていく。意味がわからない。明は失礼します、と声をかけてテントの中に顔を出した彼は我が目を疑った。目を何度もこすり、それを見ている彼は夢か現実か確かめるために頬をつねる。痛い。現実であるとわかった明はそれを受

け入れるしかなかった。

体育館の広さを持つテントの中で、上半身の男たちは腕立て伏せ、腹筋、スクワットなどしていた。そこには、当たり前のように男たちが同僚に筋肉を見せびらかしていた。

「アキラさん、失礼します」

テントの前で立ち止まる明を不審に思ったサティエリナが、足を踏み入れると、いままでトレーニングしていた男たちの動きが止まった。石像のように動きを止めた男たちのことを見向きもせず、この場で唯一動く人物まで近づくと、

腕立て伏せをしている男性　短く切り込んだ金髪、彫りの深い

せいがん  
精悍な顔つき、M型の

ひげ  
髭が立派なのは、ユグドラシル現国王であるギース・ゴラエツト・バルであった。

「……父上」

「おお、我が最愛の娘サティエリナよ！　なぜここにいるのだ？」  
腕立て伏せをやめた彼が立ち上がると、彼女は白狼について一言告げただけで彼の顔つきは変化した。タオルで汗まみれの全身を拭きながら、石像のように固まる男たちに解散！　と命じた。

「さて……こうしてゆっくりと話すのは初めてとなるな、勇者アキラよ」

衣服を身にまとったギースと向かい合って座るのは、明と恵美の2人だけであった。吉夫はメイドになりきっているのか、明たちと座ることなく、彼らの後ろで控えていた。同じように、ギースの隣に座るサティエリナの専属騎士であるジュリアスも彼のように、彼

らの後ろで控えていた。

「は、はい。ゆっくりと話し合う時間さえありませんでしたね」

「緊張するではない。もっと砕けた口調ではないと、話ができないだろう？ それに、いまの私はユグドラシルの王ではなく、1人の人間としてここにいるからな」

「……わかりました、ギース陛下」

始めて出会った時とはことなる雰囲気には、これが本当の彼である。と心の中で再評価してしまう。明は大きく息を吸い、白狼について語り出そうとしたときに、ギースが先に口を開いた。

「アキラよ、こちらの世界　アースに来てからすでに5日も経つが……なにか変わったことはなにもないのか？」

「あります。3日間もフィオナの森で魔物狩りをしていたら、突然、風の魔法を使えるようになりました」

「風か……。言い伝えにある通りに、召喚される勇者は必ず風と光の魔法を習得するというが……アキラ、光の魔法はどうだ？」

「いえ、僕はいまのところ風しか感じることはできません……。しかし、なぜ、必ず風と光なんですか？」

「知らん。ただ、1つだけ断言できることは魔を払う力、ということだ」

彼らの会話を聞いているサティエリナは黙っているのも面倒になり、明の後ろに控える吉夫に目でアイコンタクトを送る。3日もずっと彼女の世話をしてきた彼は、サティエリナがなにかをして欲しいを察する。なにをすればいいか、と思考していると、彼女の機嫌をよくすることを思いついた。

サティエリナの背後に立ち、懐に隠していた櫛くしで彼女の髪をすいでいく。メイドとして働くようになったせい、櫛くしぐらいは当たり前のように持ち歩くようになってしまったのは、彼女のせいである。

上機嫌なサティエリナは吉夫にどのような下着がいいか、どのような色がいいのか、と彼にとって屈辱的な質問をぶつけていく。それなのに吉夫は気にすることなく、平然と彼女の質問に答えていく。

これは恵美が、吉夫くんに似合う下着はどれがいいのか、私が選んであげる、と下着をたっぷりと見せつけられたせいで耐性ができてしまったのだ。

「サティエリナよ……アキラが顔を赤らめているだろう？ もう少しだけ音量を下げてはくれぬか？」

「いやいやいや、真剣な話をしている最中に女性の下着について語られると、そつちのほうを聞きたくなるだけですから」

「男だな……アキラよ」

「うわ……つい、いつもの癖でツツコミを入れたよ。……すいません、ギース陛下」

「はっはっはっ、気にすることはない。男とは、常に女を求めてしまう生物であるからな。そのような話には誰だって興味があるだろう？ 私も若かった頃、よく同僚たちと女性の下着について語り合っただぞ」

堂々と過去を暴露するギースにサティエリナは、心の中で母上に報告しようと決意し、明はどう反応すればいいのかわからない。恵美はギースに呆れてしまい、ジュリアスは彼が後で‘お仕置き’されることに苦笑いを浮かべた。

「話がずれたな、アキラよ」

「ええ、脱線しましたね」

「話に戻るとするか……。本題である白狼について知りたいのだろうか？ サティエリナよ？」

確認するようにギースが問いかけると、彼女は首を縦に振り、彼は自分が知っていること 白狼について語り出した。

白狼とは、昔からフィオナの森に暮らす精霊であり、ユグドラシルという国を太古から守り続けてきた存在。争いを好まず、普段は森の奥でひっそりを暮らしているがユグドラシルの危機のみ姿を現し、人々のために戦う。人々は白狼に感謝しながら、彼を神として崇<sup>た</sup>りながら日々を過ごしていく。

「父上、白狼が精霊というのはどういことですか？」

「慌てるではない、話は始まったばかりだぞ？」

月日が流れ、いつしか人々は白狼のことを忘れてしまい、彼らは自分たちの好きなように毎日を過ごしていた。栄枯盛衰を繰り返していく人々を白狼は遠くから見守り、彼らになにもすることはないと判断した彼は森の奥でゆっくりと生きる。

だが、ある日、当時の王がユグドラシルをより大きくするために、森を焼かなければならない、と国民に命じた。彼らは王に疑問を抱くことなく、命じられるままに森を燃やしていく。

白狼は人々のために命を懸けて戦ってきたのに、彼らは恩を忘れ、自分たちの欲望のためだけに森を燃やすことに腹を立てた。森を燃やしていく人々の前に現れた白狼は迷うことなく、その場にいたすべての者の命を奪った。

以来、精霊であった白狼は魔物と呼ばれ、ランクAという危険度を付けられた。

「以上。質問は？」

「……なぜ、父上は本にさえ書かれていない話を知っているのですか？」

「すべて口で語り継がれてきたからこそ、本に書かれていないのだ」「たしかにそうですね……あれ？ なにか大切なことを忘れていたような気が……」

なにかを忘れていたような気がするサティエリナは思い出そうとしていると、ギースが明に、娘とは良好な関係なのか？ と疑問をぶつけていたので、彼女は考えることをやめた。

途中でジュリアスが明をからかうために、アキラは胸が大きい女性が好きだろうか？ といえば、彼は巨乳こそ女性の特徴であると即答した。すぐさまにサティエリナは彼に、外見よりも中身重視と説教しだす。

この時、誰も吉夫と恵美がいなくなっていたことに気付いてはいなかった。

ギースたちの話を聞いていて退屈であると感じていた吉夫は、誰にも気が付かれることもなく、ひっそりとテントから抜け出した。彼らの話はたしかにおもしろいが、あそこには自分がいなくても大丈夫であると判断したからだ。

「……やることねえ」

槍を背負っている彼は自分が注目されていることすら気にも留めずに、駐屯場を歩き回る。その間に、彼はメイドになってからの3日間を振り返るうとして やめた。正直、あれは恥ずかしい。初日にサティエリナから、わたしの手伝いをする？ と言われ、やることのなかった吉夫は仕方なく彼女の手伝いをした。その最中に、恵美がひよこりと顔を出し、せっかく吉夫くんがサティエリナさんの手伝いをしているから、メイドさんになろう、と宣言された。

恵美によつてメイド服に着せ替えられた吉夫は、サティエリナの補助をしていたら、他のメイドたちから人手が足りない、とSOSされた。これも仕方なく、彼女たちの仕事を手伝っていたら、いつの間に関日が暮れるまで働いていた。

メイド長が、今日はお疲れ様でした、とメイドたちに告げたときに見慣れないメイドがいて、彼女は誰なのか、と問いかける前に気が付いた。吉夫であると。すぐに彼女は、申し訳ございませんと謝罪し、本人といえば、魔の手から逃れただけでよかったよ、と返した。

以来、吉夫はメイドたちと一緒に働いており、魔の手である恵美から逃れるために彼は一生懸命メイドとしてがんばった。おかげで、サティエリナから専属従者にならない？ と提案されたこともある。「……本当に、あの娘たちに許してもらえてよかった」

頭の中に浮かび上がるのは、一番忘れたかったあの出来事のみ。この3日間、恵美が女の子同士の付き合いはやっぱりお風呂だね、と有無を言わせることもなく、吉夫は彼女に風呂場まで拉致された。気がついたら、身にまとっていたメイド服を脱がされてしまい、代わりにあったのはバスタオル一枚のみ。振り返れば、恵美もバスタオル一枚のみの姿で、彼女は困惑する彼など気にすることもなく、風呂場まで背中を押された。

風呂場というのは、思っていたよりも大きく、50人ぐらいの人が入ってもまだ余裕がありそうな場所だった。問題はここではなく、そこにいた少女と女性たち。

一糸纏わぬ姿で体を洗い、風呂に浸かる少女と女性たちは気持ちよさように目を細めていた。あそこにいた全員は、住み込みで働くメイドたちであった。

あの時、吉夫はぶはつと盛大に鼻血を吹き、虹のアーチならぬ血のアーチを作ってしまったのだ。おかげで注目を浴びてしまい、吉夫は殺されるか、気が済むまで殴られるか、と想像していたが、彼女たちは許してくれた。すべての根源であるのは、恵美であると彼女たちは理解していたため、その日以来、入浴する場合はバスタオルま巻くべき、というルールが生まれた。

「……うわ、今日はジュリアスも一緒じゃないか。これは……バレたら殺されるところで済まないぞ」

考えただけでゾツとする。

元は男であった吉夫が女性専用の風呂場を利用し、彼女たちの肢体を思う存分眺めることができる、とジュリアスに思われる。実際に、吉夫は彼女たちの肢体すら見ていられるほど余裕などなく、顔をうつむかせながら着替えるだけで精一杯なのだ。まあ、その際に赤や白、緑に黒というさまざまな色が目に映ることは仕方ないこと。「でも……ポニーテールではないジュリアスもいいかもしれないな」

「へえ、吉夫くんってジュリアスさんのことが好きなんだ」

「め、恵美!？」

心臓が止まるくらいまで驚いた吉夫は、彼女がすぐ近くまで接近したことにすら気付くことはなかった。吉夫は何度も深呼吸を繰り返して、目の前に立ち止まる恵美がいたから、落ち着いたところで彼女の頬をつねる。

「いきなり声をかけるな、エロ恵美」

「だって、私が何度もあなたに声をかけたのに見向きもしないで、ぶつぶつとあの娘の肢体は……とか呟いて、ニヤニヤしていたくせに」

「……マジで？」

「うん、本当だよ。　　じよ、冗談だから落ち込まないでよ、吉夫くん！」

その場でしゃがみ込んで、おれって最悪な奴だ最悪な奴だ、と嘆いていた吉夫に恵美が訂正すると、彼は再び頬をつねる。もう慣れしてしまった痛みなのに、今回はやはりいつもより痛くて泣きそうになるぐらい。

「よ、吉夫くん。は、離してえ」

「あ、悪い」

うるうると潤んだ瞳を上目使いで見上げる恵美に、罪悪感を覚えた吉夫が手を離すと、彼女はつねられた頬をさする。さすがに、今回ばかりはいつもよりもやり過ぎた吉夫が謝罪でもしようかと、考えていたら恵美が、

「ジュリアスさんのこと好き？」

と口にしたので謝らないことにした。

「好きってわけじゃないさ。ただ、あいつが普通の髪型だったら、と想像していただけさ」

「私は一度だけジュリアスさんの普通の髪型見たことあるよ？」

「それは……一緒に風呂に入るから、嫌でも見てしまうだろう」

「そうだよ。でね、こっちに召喚されたときに、サティエリナさんとジュリアスさんと一緒に風呂に入った時……私の理性がぶっ飛んじやった」

「……は？」

「あ、あのね、吉夫くん。本当に理性がぶっ飛んじやったの。ジュリアスさんの鍛えられた肉体に、たわわに実った果実がたまらなくて……しかも、巨乳じゃなくて爆乳だよ。痛いよ、吉夫くん！」

これ以上、彼女たちの間になにがあつたのか知りたくもない吉夫は彼女の無事な頬をつねる。少なくとも、恵美の理性が飛んでしまふほど、彼女たちの肢体が美しかった、と話の流れだけでわかった。吉夫にとって、何故サティエリナが恵美と一緒に風呂に入らたがらないのか、納得できた。

「……」

「……」

会話が途切れると、2人の間に沈黙が訪れる。なにか話題はないのか、と思考していると吉夫はあることを思い出し、そのことについて彼女に問いかけることにした。

「なあ……どうして、恵美は鈴音りんねの提案を……彼氏彼女の案について受け入れた？」

それは恵美と出会ってから、一番知りたかったこと。

彼女、二階堂恵美は田倉高校では男子が付き合いたい女子ベスト3に入るほどの人気であつた。男子から告白されることがあつても、彼女はけっして受け入れることはなかつた。

当時の彼女は、田倉高校の剣道部の部長として部活に励み、誰もが彼女の実力を認めていた。放課後になると、彼女は迷うことなく部室に向かい、日が暮れるまで竹刀を振るっていたというのだ。部活だけで精一杯の彼女が、他人のためにわざわざ部活をサボることはありえない。

「それはね……鈴音が吉夫くんのことについていろいろ教えてくれたおかげだよ。吉夫くんは人嫌いで、他人には興味を抱くこともなく、気に入った人として話をしないということを知ったから。」

だから、私はあなたの友達になつてもいいかも、と結論を出して、あの日、あなたと出会ったの」

「そのためだけに……部活をサボったのか？」

「私がいなくても、部員たちにはしっかりと練習するように鍛えたから平気だよ」

「……鬼だ」

「鬼でけっこうだよ。」

これで……私が鈴音の提案を受け入れたことについて話したから……次は吉夫さんの番だよ」

「……単純に、恵美という鈴音の親友はどういう人なのか知りたかっただけだ」

ふいつと顔を背ける吉夫の頬はほんのりと赤く、からかいたくなつた恵美は彼に反撃しだす。これまで、散々（さんざん）頬をつねた罰として。

「他人に興味ない吉夫くんが私について知りたかったというけれど……本当は、気になっていたじゃないの？」

「気にならない！」

「嘘だね。だって、鈴音がよっしーは女の子には興味ない、とか言っていたよ？ それも、毎回鈴音が紹介しようとする女の子を拒絶するぐらいだから……私のこと、気にしていたの？」

「ああ、そうだよ！ 悪いかよ！？ おまえみたいなスゲーかわいい女の子だったら、おれでも興味津々になってしまっからな！」

思わず本音を告げてしまった吉夫が慌てて口に手を当てるが、時すでに遅し。

花のような笑みを浮かべた恵美は、吉夫くんも男の子だよね、と呟いていたのを彼は聞いてなかった。聞く余裕すらない吉夫は焦っており、恵美は二度と来ないかもしれないこの機会を利用しておくことに。

「吉夫くん……私のこと好き？」

「ああ、好きだよ！ いや、恵美のことを気に入っているだけであつて、けっして好きではない！」

「どっちなの？ あ、友達としてか、異性としてか答えてね」

「友達として好きだ！ 大好きだ！ つて、おまえはおれに恥ずかしいことを言わせていよな！？ なっ、恵美！？」

「いひゃい、いひゃい、いひゃい！！ 私の頬が千切れちゃうよお、吉夫くん！！」

顔を真つ赤に染めた吉夫は恵美の頬を遠慮なくつねてあげると、彼女はこれまで感じたことのない痛みに抗議していた。

でも、吉夫は恵美とこうして打ち解けることができたから、鈴音の親友'から'本当の友達'として彼は受け入れることができた。こうして誰かと一緒にいるのも悪くはない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6970u/>

---

勇者と黒槍

2011年10月5日03時11分発行